

ザンビア特別教育プログラムの 成果と課題 II

～「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像～



主催

広島大学大学院国際協力研究科 (IDEC)

共催

広島大学

独立行政法人国際協力機構 (JICA)

後援

文部科学省

成果報告会 & シンポジウム 開催報告書

平成27(2015)年1月24日(土)
キャンパス・イノベーションセンター東京

プログラム

- 13:30～13:45 **ご挨拶**
文部科学省大臣官房国際課 政策情報分析官 佐藤 兆昭
JICA 青年海外協力隊事務局 次長（国内業務担当）山田 健
広島大学大学院国際協力研究科 教授・研究科長 藤原 章正
- 13:45～14:20 **ザンビアプログラム成果と課題～縦断的調査に基づいて～**
広島大学大学院国際協力研究科 教授・副研究科長 馬場卓也
- 14:20～15:10 **成果報告**
広島大学大学院国際協力研究科 博士課程前期2年在籍 竹内 希
JICA 人間開発部高等・技術教育チーム専門嘱託 辻本 温史（修了生）
- 15:10～15:30 **休憩**
- 15:30～16:55 **シンポジウム：今後の協力隊×大学院教育の連携の可能性について**
北海道教育大学函館校 国際地域学科 講師 石井 洋（シンポジスト）
広島大学大学院国際協力研究科 教授 清水 欽也（シンポジスト）
関西学院大学 国際学部 国際学科 教授 關谷 武司（シンポジスト）
広島大学大学院国際協力研究科 教授 馬場 卓也（司会）
JICA 青年海外協力隊事務局 次長（国内業務担当）山田 健（シンポジスト）
- 16:55～17:00 **閉会の辞**
広島大学大学院国際協力研究科 教授・前研究科長 池田 秀雄
- 総合司会：東京未来大学 こども心理学部 専任講師 中和 渚（修了生）
- 17:00～18:00 **ザンビア特別教育プログラム 説明会**

巻頭言

「ザンビア特別教育プログラム」は、JICA 青年海外協力隊と広島大学大学院国際協力研究科(IDEC)が連携して、2002 年から開始された。これは、青年海外協力隊の原点にある協力活動を通じた人材育成と、大学院教育の原点にある研究を通じた人材育成とを組み合わせ、専門的な国際教育協力人材を育成する、日本で初めての先進的な試みである。2009 年 12 月には、その成果を振り返る目的で、第 1 回目の成果報告会が実施された。報告会ではそれまでの実績報告や活動・研究の発表が行われ、シンポジウムではプログラムの今後について、関係者並びに参加者を巻き込んで話し合った。

2014 年度 IDEC は創立 20 周年を迎えるに当たり、記念行事の一環として第 2 回の成果報告会を、JICA と共催、文部科学省の後援を受け開催した。当日は、13 年間の派遣実績（2015 年 5 月までに修了生 23 名）などの成果を振り返ると共に、修了生に対する縦断的調査（参加前の学歴や実務経験、参加の動機、現地での活動、修了後の就職先等）を行い、キャリアパスを 4 類型に纏めた。シンポジウムでは、IDEC の教員や修了生とともに、プログラム共同実施者（JICA 青年海外協力隊事務局 山田次長）や外部有識者（関西学院大学 關谷教授）を招聘し、プログラムの成果の確認とさらなる可能性について話し合った。この小冊子は成果報告会及びシンポジウムの記録として編纂したものである。

近年、グローバル人材の育成がますます重要な課題となる中で、青年海外協力隊と大学院の連携プログラムは増加しつつある。そのような中で、本プログラムが有する長期派遣の活動・調査に基づく修士論文の執筆という本質性と先進性を再確認した次第である。しかし立ち止まっていたら、先進性もいつしかアナクロニズム（時代錯誤）に陥ってしまう。今回頂戴した視点を踏まえて、新たな先進性を求めて連携の在り方を再構築していきたい。

最後に、今日までご支援頂き、報告会にもご参加頂いた文部科学省、JICA 協力隊事務局に厚く御礼申し上げます。

広島大学大学院国際協力研究科
教授・副研究科長 馬場卓也

目次

巻頭言	1
目次.....	2
ご挨拶.....	3
発表者等のご紹介.....	9
第一部	13
成果報告会	15
発表資料.....	16
質疑応答.....	27
第二部	31
シンポジウム	33
シンポジウムを終えて	55
シンポジウム発表資料	57
閉会の辞.....	59
第三部	61
アンケート結果.....	63
参考資料.....	67

ご挨拶

皆様、こんにちは。文部科学省大臣官房国際課の佐藤と申します。

「広島大学ザンビア特別教育プログラム成果報告会」の開催にあたり、文部科学省を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

文部科学省では、これまで関係省庁と連携しながら、開発途上国に対する支援、協力を実施してきました。

文部科学省自体の ODA 予算は平成 26 年度予算で、約 222 億円。予算額の大半は、国費留学生や私費留学生に対する奨学金ですが、その他、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）への協力やユネスコへの教育協力事業への信託基金の拠出等を実施しています。

本日は、最近の文部科学省の取り組みとして、3 点説明させていただきます。

1 点目は、政府全体の取り組みですが、ODA 大綱の改定がございます。ODA 大綱の改定案では、①人づくりや法整備支援等、自助努力や自立的発展の基礎の構築、②科学技術・イノベーション促進、研究開発、万人のための質の高い教育、文化・スポーツ等、人々の基礎的生活を支える人間中心の開発を推進するための教育等、必要な支援の実施、③大学・研究機関との連携による教育・学術研究の知見の活用、人づくり等のソフト面の支援による日本の経験と知見の積極的な活用が盛り込まれ、国際協力を行っていくうえでの、人材育成や科学技術分野の重要性等、大学が果たす役割が期待されているところです。

2 点目は、基礎教育を中心としたところですが、ポスト 2015 教育アジェンダ、ポスト MDGs に向けた議論です。

EFA（万人のための教育）については、ご承知の方も多いと思いますが、2000 年にセネガル・ダカールで開催された「世界教育フォーラム」において、途上国における教育状況を改善し、万人に教育へのアクセスを確保するため、2015 年を期限として、途上国及び先進国が共同して取り組むべき開発目標「ダカール行動枠組」として、6 つの目標が定められました。「ダカール行動枠組」への取組の結果、不就学児童数の減少や就学における男女格差の是正等、一定の成果を上げてきましたが、依然として残る不就学児童数や成人の非識字者数、教育の質の確保等の課題が残されているところです。

現在、ユネスコを中心とする関係者間において、2015 年以降の枠組を定めた「ポスト 2015 教育アジェンダ」策定に向けた議論が進められています。「ポスト 2015 教育アジェンダ」は、2015 年 5 月に韓国・仁川で開催される「世界教育フォーラム」で採択予定ですが、文部科学省としても、外務省、JICA 等の関係機関と連携を図りながら、策定に向けての議論に参加しているところです。

また、ポスト MDGs については、2015 年 9 月以降に国連において採択される予定ですが、ポスト MDGs にも教育に関する目標等がしっかりと盛り込まれることが重要と考えており、ポスト MDGs 策定に向けた議論についても、積極的に参加していく予定です。

3 点目としては、「地球儀を俯瞰する外交」や世界の成長を日本の成長に取り込む「経協インフラ戦略会議」等についてです。

安倍内閣誕生以来、「地球儀を俯瞰する戦略的な外交」を掲げて、活発な外交活動を展開。ASEAN、アフリカ、中南米等へ出張され、当該地域との連携強化を図っているところです。これらの地域からは、人材育成に関する日本への強い期待があります。

アフリカ地域を取り上げますと、昨年 6 月に横浜で開催された TICAD V 及び本年 1 月の総理のアフリカ出張を受け、5 年間で 1,000 人の若者を日本に留学させる「ABE イニシアティブ」が開始されました。「ABE イニシアティブ」は JICA 事業であります。本年 9 月に来日した第 1 バッチでは、156 人の若者が我が国の 48 大学 70 研究科に留学しました。来年の秋に入学予定の第 2 バッチについても現在、現地において選考が行われると承知しております。これらの学生が、単なる学問の修得だけではなく、日本文化や日本語、日本社会に関する知識を習得し、将来の日・アフリカ間の架け橋となる人材となることを期待しております。

また、本年 11 月に名古屋で開催された「ユネスコ ESD 世界会議」に世界各国の教育大臣等が多数参加される機会を捉え、文部科学省では「アフリカ諸国との教育大臣会議」を開催しました。同会議には、文部科学省から下村文部科学大臣、アフリカ諸国から 28 か国の教育大臣等が出席され、教育分野における今後の交流促進等についての意見交換を実施しました。アフリカ諸国からは、①教育や人材育成の重要性、②科学技術力向上のための理数科教員の増加や高等教育分野のレベルアップのための日本からのさらなる支援、③アフリカ諸国からの日本への留学生受入れの大幅増加への期待等が表明されたところです。

アフリカを例に取り上げましたが、ASEAN 地域や中南米地域においても、人材育成分野についての日本への期待は高いものがあります。

文部科学省が所管する教育分野や科学技術分野における国際協力を進める際の人的リソースは、大学・研究機関です。大学発、日本発の知的貢献に大きな期待が寄せられているところですので、大学における国際協力への積極的な取り組みを期待しています。

「発展途上国の諸課題の解決に取り組むことができる高度専門職業人の育成」という目的の一環として、広島大学と JICA による連携により実施されている本プログラムは、これまで 13 年間にわたって実施され、2013 年度までに 21 名の修了者のいる、実績のあるプログラムです。本プログラム修了生は、青年海外協力隊員としてザンビア共和国に赴き、現地の学校や教育センターでの教育分野における国際協力を通じ、実地経験に基づく知識を身

に付けられていることと思います。

また、本プログラムの修了者の多くが小中学校の教員となっていると伺っています。現在、学校教育にはグローバル人材の育成が求められています。ここでいう「グローバル人材」とは、「異文化を理解し、異文化の人々とコミュニケーションする力を持つ人材」であり、さらにその前提として、「自分自身が暮らす社会の文化を理解する力」を持つ人材にほかなりません。そうした人材を育てるうえで活躍が期待されるのが、青年海外協力隊等、JICA ボランティアとして自ら海外を経験した教員です。異文化にどう対応すべきか、子どもたちにロールモデルを示せるからです。JICA ボランティア経験者が、異なる文化に属する人たちとどういうふうと一緒に暮らし、一緒に仕事をしてきたのか、折に触れて子どもたちに話していくことは、グローバル人材の育成という点で非常に重要だと思います。

広島大学大学院国際協力研究科におかれましては、これからのグローバル社会において活躍する人材を育成するだけでなく、グローバル人材を育成できる人材を創り上げる機関として、ますますその存在意義を発揮されることを期待しております。

本日は、これまでの成果発表を聞かせていただき、本プログラムの今後の発展をともに考えていきたいと思っております。

最後に、本日の会議をお世話いただいた広島大学関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

文部科学省 大臣官房 国際課
政策情報分析官 佐藤 兆昭



ご挨拶

(謝辞)

ただいまご紹介にあずかりました、独立行政法人国際協力機構（JICA）の山田です。本日は、青年海外協力隊事業と広島大学大学院との連携による「ザンビア特別教育プログラム」にかかる成果報告及びシンポジウムを共催することができ、うれしく思います。

文部科学省 大臣官房 国際課 政策情報分析官 佐藤兆昭さま
広島大学 大学院 国際協力研究科 教授 池田秀雄さま 馬場卓也さま

JICA の国際協力事業を日ごろより多大なるご支援を賜り、まことに感謝いたします。本日はよろしく願いいたします。

(協力隊について)

青年海外協力隊事業は 1965 年に開始された事業ですので、今年でちょうど 50 年となります。そしてこの 6 月には累計 4 万人を突破することが見込まれています。そして本日現在でも 2000 人ほどの隊員が 69 カ国に派遣され、現地に根付いた活動を行っています。

(連携事業について)

大学との連携事業についてですが、ザンビア特別教育プログラムについては後ほど研究科よりご紹介があると思いますので、全般的な傾向を申し上げますと、現在 12 の大学と連携協定や覚書を交わしています。一方 ODA 事業への国民参加・市民参加のひとつのあり方としての大学との連携が進められていますが、その成果や効率性などについては、より一層、厳しく求められる状況となっています。

2013 年 6 月にアフリカ開発会議（TICAD）V が横浜で開催されました。民間セクターや開発の持続性が重視される中、「万人が成長の恩恵を受ける社会の構築」という、**Inclusive** な開発に力を入れる態勢がこれまで以上に鮮明に求められています。また、これに併せて「万人のための教育」という、教育の現場や教育の受け手を開発の主人公に置こうとすることの大切さが再認識されるようになってきています。次回の TICAD はアフリカで開催される可能性があります。開発の「現地」をできる限り視界の真ん中に置こう、という姿勢がますます強まり、その文脈で開発効果をしっかりと見なければならなくなっています。

そのような中、本連携プログラムでは、派遣国をザンビア、職種を「理科教育」「数学教育」と絞ることで、成果を明確にし、効果的で継続的な支援が可能になっています。

同時に、大学院の研究の面においては、夾雑物を介さない、現地の生きた情報を踏まえたものであるという点で、より大きな効果があろうと認識しています。

(人材育成の面)

本連携ではこれまで修了生が 21 名と、これからさらに発展が期待できる状況であります。これらの方々から JICA 専門家やジュニア専門員として国際協力の世界で活躍する方、学校教育に携わる方などが生まれていると聞いています。この連携事業が人材育成の機会としても有益で貴重だと考える所以です。

(結び)

研究や理論は、その実践が伴って初めて社会に役立つものになります。この連携プログラムに参加した学生たちは、協力隊の理念でもある、現地の人々と一緒に汗を流す草の根協力を 2 年間も経験した人たちです。

このように現場で一緒に汗を流す大切さを理解する若い研究者が、近い将来、世界の教育セクターや人間開発の中枢を担ってくれるものと期待しつつ、私の冒頭のあいさつとさせていただきます。

JICA 青年海外協力隊事務局
次長（国内業務担当）山田 健



ご挨拶

ご臨席の皆様、本日は週末にもかかわらず、「広島大学－JICA連携 ザンビア特別教育プログラム成果報告およびシンポジウム」にご参加くださいますようお願い申し上げます。特に本報告会の開催にあたり共催として多大なご協力をいただきました JICA 青年海外協力隊事務局の皆様、日頃から当大学院の国際協力活動に様々な形でご支援をいただいております文部科学省大臣官房国際課の皆様、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、広島大学大学院国際協力研究科は名古屋大学、神戸大学に続いて国立大学で3番目の国際開発系大学院として1994年6月に設置され、本年度で丁度20周年を迎えたところでもあります。昨年11月には元 JICA 副理事長の大島賢三氏、外務省国際協力局審議官の豊田欣吾氏をお迎えし、記念事業を開催したところでもあります。

創立して20年の間に、文理融合研究と現場を重視した実践的教育をミッションとする当研究科は、関係各位のお力添えをいただきながら、いくつの実績を重ねてきました。なかでも高い評価をいただいておりますのが、本日のテーマの「ザンビア特別教育プログラム」であります。JICAの青年海外協力隊活動と大学院の専門教育研究活動を連携させて国際協力人材を育てるといふ、当時は少々既成概念を越えた挑戦でありました。

お蔭をもちまして、2002年度からの13年間で21名の修士号取得者を輩出することができ、彼らは幅広い教育協力活動を推進しております。本日は、感謝の意を込めて、長年の活動成果を総括させていただくとともに、今後さらなる発展を目指して、青年海外協力隊と大学院教育の連携のあり方について考える機会をいただくことを目的に報告会を開催する運びとなりました。

本日ご臨席の皆様方にとっても意味のある報告会となりますようお願い申し上げます。

広島大学大学院国際協力研究科
研究科長 藤原章正

ご挨拶・発表者等のご紹介（敬称略）

ご挨拶

佐藤 兆昭（さとう よしあき）

文部科学省大臣官房国際課政策情報分析官

1983年旧文部省に入省し、留学生課、国際教育文化課等、長年 OECD 教育委員会等の国際関係業務に従事し、1996年には外務省に出向し、在スラバヤ総領事館で勤務。1999年国立科学博物館普及課長、2001年文部科学省官房国際課国際調整官、2006年信州大学研究推進部長、2008年総合地球環境学研究所管理部長、2011年京都大学研究国際部長を経て、2013年4月から現職。



ご挨拶&シンポジスト

山田 健（やまだ けん）

JICA 青年海外協力隊事務局 次長（国内業務担当）

JICA ボランティアの募集・訓練・国内連携・帰国支援・広報を総括する。

アフガニスタン事務所次長、バルカン事務所長を歴任され現在に至る。



ご挨拶

藤原 章正（ふじわら あきまさ）

広島大学大学院国際協力研究科 教授・研究科長

専門は交通工学で、安全かつ快適で持続可能な都市交通の確保に向けて、道路や公共輸送機関などの交通基盤整備計画、交通需要マネジメントや高度道路交通システムなどの交通管理計画の手法について研究を行っている。「日本技術者教育認定機構定・審査調整委員会委員」、「文部科学省環境エネルギー科学技術委員会委員」や「広島市都市計画審議会会長」なども務める。



ご挨拶（閉会の辞）

池田 秀雄（いけだ ひでお）

広島大学大学院国際協力研究科 教授・前研究科長

国際協力分野でケニア、フィリピン、バングラデシュ等での理数科教育改善活動に従事。ザンビア特別教育プログラムの責任者を努め、「大学院生の海外ボランティア活動としてのザンビア派遣とその組織化に関する実証的研究」など、国際協力分野における人材育成モデル研究も行っている。ザンビア特別教育プログラムでは、巡回指導として2回、JICA カリキュラム改訂支援の短期専門家として1回、現地入りをしている。



成果報告&シンポジウム司会

馬場 卓也（ばば たくや）

広島大学大学院国際協力研究科 教授・副研究科長

JICA プロジェクト「バングラデシュ小学校理数科教育強化計画」を国立大学法人として初めて受託（パデコ社と共同）。バングラデシュ、ザンビアなどで国際協力実践に参画するとともに、各国の学校教育の取り組みを教科教育の視点から分析。国際協力実践と理論研究の統合・発展、そして教室の中から発送する教育開発を目指している。ザンビア特別教育プログラムでは、巡回指導とし4回、JICA カリキュラム改訂支援の短期専門家とし1回、科学研究費調査で3回、現地入りをしている。



発表者（ザンプロ現役生）

竹内 希（たけうち のぞみ）

広島大学大学院国際協力研究科

博士課程前期2年在籍

理科教師を目指し新潟大学教育人間科学部に在学中、ザンビア特別教育プログラムを知り関心を抱く。2011年4月にIDECへ入学し、2012年6月から2年間ザンビア特別教育プログラムで派遣。現地では、中学の理科と高校の生物を担当。現在は、ザンビアの中等理数科教育における生徒の興味関心と教育効果について研究を行っている。2015年3月修了予定。



発表者 (修了生)

辻本 温史 (つじもと あつし)

JICA 人間開発部高等・技術教育チーム専門嘱託

2003年に大阪大学文学部卒。同年 IDEC 入学。ザンビア特別教育プログラムへの参加(2005年～2007年)を機に教育分野での国際協力を志す。修士では生徒のおかれている文化的な環境が学校教育に及ぼす影響を研究。2008年 IDEC 修了後、JICA 人間開発部教育課題支援スタッフ、JICA ジュニア専門員、ルワンダ事務所企画調査員、エジプト日本科学技術大学設立プロジェクト業務調整員を経て、2014年2月より現職。基礎教育分野だけではなく、技術教育・職業訓練、高等教育分野の案件にも従事し、人材育成分野での幅広い経験が強み。



シンポジスト (修了生)

石井 洋 (いしい ひろし)

北海道教育大学函館校 国際地域学科 講師

小学校教員として勤務していたが、現職教員特別参加制度を利用して2006年から2年間、青年海外協力隊(ブータン小学校教諭)に現職参加。派遣中に国際教育協力への関心が高まり、大学院修学休業制度を利用して2009年に IDEC へ入学。短期ボランティアとしてザンビア特別教育プログラムに参加し、修了後は博士課程後期へ進学。その後も小学校教員を続け、2014年より現職。現在の研究テーマは、開発途上国における授業研究を通じた数学教師の教授的力量形成。



シンポジスト

清水 欽也 (しみず きんや)

広島大学大学院国際協力研究科 教授

2008年に本学教育学研究科から異動して以降、バングラデシュやカンボジアの JICA 教育協力プロジェクトに短期専門家として従事。広島大学が日本ユネスコ国内委員会並びにユネスコ・アジア太平洋地域教育開発計画と共同で実施している国際セミナーでは、中心的な役割を担っている。ザンビア特別教育プログラムでは、JICA による派遣を含めてこれまで2回ほど、現地入りをし、学生指導、ザンビア大学との関係構築等に従事。



シンポジスト (外部有識者)

關谷 武司 (せきや たけし)

関西学院大学 国際学部 国際学科 教授

阪神・淡路大震災に際しては、避難住民支援ボランティア活動にあたった。その後、ハリケーンミッチ災害被災民緊急救援活動（ホンジュラス共和国）、コソボ紛争被災民緊急救援活動（アルバニア共和国）に携わるなど、世界を舞台に国際社会貢献活動に従事。

JICA 専門家、国際教育協力コンサルタント代表取締役を経て、2009 年から関西学院大学。文部科学省助成プログラム、「スーパーグローバルユニバーシティ」の中核的活動となっている「国際ユースボランティアプログラム」を国際ボランティア計画（UNV）との協定に基づき実施。



全体司会 (修了生)

中和 渚 (なかわ なぎさ)

東京未来大学 こども心理学部 専任講師

アフリカンダンスによってアフリカに好奇心を抱き、様々な御縁によりザンビア特別教育プログラムに参加した。プログラム参加の2005 年以来ザンビアの教育や子どもたちに関する研究を続けている。博士課程後期における研究テーマは「ザンビア人教師との協働による数学授業づくりについて」。2011 年より東京未来大学で勤務するかたわら、ザンビアを始め、ネパールやカンボジアの研究も行ってきた。2013 年には出産を経験し価値観などが劇的に変化した。そこでその視点の変化、広がりなどを今後の研究にも活かそうと思っている。



第一部
成果報告会

成果報告会

発表：ザンビア特別教育プログラム成果と課題～縦断的調査に基づいて～

広島大学大学院国際協力研究科 教授・副研究科長 馬場卓也

成果報告：

広島大学大学院国際協力研究科 博士課程前期2年在籍 竹内 希

JICA 人間開発部高等・技術教育チーム専門嘱託 辻本 温史 (修了生)



馬場卓也 教授



竹内希さん



辻本温史さん

ザンビア特別教育プログラム成果と課題 ～縦断的調査に基づいて～

国際協力研究科・副研究科長/教授
馬場卓也
研究員
下田旭美



1. ザンビア特別教育プログラム概要
2. 成果－派遣及び研究実績
3. 成果と課題－キャリア形成
4. ザンプロキャリア形成モデル
5. 成果と課題－波及効果

1. ザンビア特別教育プログラム概要

- ◆ 2002年から広島大学とJICAが連携
- ◆ プログラムの目的：発展途上国の諸課題の解決に取り組むことができる高度専門職業人の育成
- ◆ 標準期間は3年6ヶ月。派遣前研修と2年間の協力隊活動を含む。
- ◆ 協力隊参加期間に、インターンシップ、フィールドワーク(各2単位)、専門科目、演習(各4単位)の計12単位が可能。
- ◆ 数学教育開発論、理科教育開発論、教育協力実践基礎論、演習など現地に必要な識・技能のための講義を整備。
- ◆ 派遣中は、定期的にメールにて研究の相談・報告。年に1度IDEC教員が研究指導にザンビアに派遣。
- ◆ 最低限の機材については広島大学で支援。

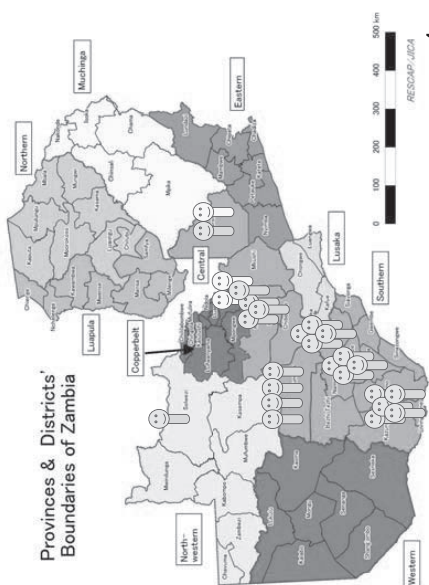


2. 成果－派遣実績

修了生：21
2002年度～2013年度

在籍生：5
ザンビア活動中 3名
日本で修論執筆中 2名
(2015年3月卒業予定)

候補生：3
2015年度派遣予定



2. 成果—研究実績

◆ 博士、修士論文リスト(抜粋)

	博士課程 論文タイトル
1.	ザンビアの理科教育に関する状況分析と授業分析法の開発
2.	ザンビア数学教師の教養の力量形成における省察の役割に関する研究 —授業日誌を用いた質的分析を中心に—
	修士課程 論文タイトル
1.	国際教育協力としての教員センターに関する研究 —ザンビア共和国南西部の事例からの検討—
2.	理科教育開発における授業研究の意義と役割 —生徒中心を目指すザンビアの基礎教育を事例として—
3.	ザンビア共和国におけるHIV/AIDSに関する情報量の多寡が予防行動に及ぼす影響
4.	ザンビアにおける『本質的学習環境(SLE)』に基づく数学科授業開発研究
5.	ザンビア共和国の基礎教育における効果的な学校経営 —スモールステップアプローチを用いた物理の指導と学習—
6.	ザンビア中央部の学校を事例として—
7.	ザンビア中等教育における物理との関連を意識した数学科授業に関する研究 —文脈依存性に着目して—

5

2. 成果—その他

◆ 文部科学省による評価

- グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する実証的研究 概要(文部科学省)(平成22年3月)
- グローバル人材育成を目指した意欲的なプログラムを展開している12の大学を対象
- 「このような国際援助機関の長期海外派遣制度と大学院教育を融合させたプログラムは、我が国初の取組である。」(p.6)
- 「隊員としての長期実践活動を踏まえた研究であるため、現地のニーズにも対応しており、また、学生も高度専門職業人として大きく成長できる点の特徴といえる。」(p.6)



6

2. 成果—その他

◆ 協力隊による評価

- ザンビア理科・数学教育への継続的な協力(広大生の継続的な派遣)
- ザンビア理数科隊員の自主活動「教師会」への貢献



7

3. 成果と課題—キャリア形成

～縦断的調査に基づいて～

◆ 調査目的

参加者への質問紙調査を元に、成果と可能性について考察

◆ 調査内容

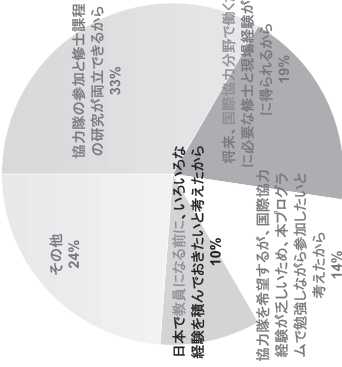
26名(修了生21名、在籍中の5名)中21名より回答。

◆ 質問事項

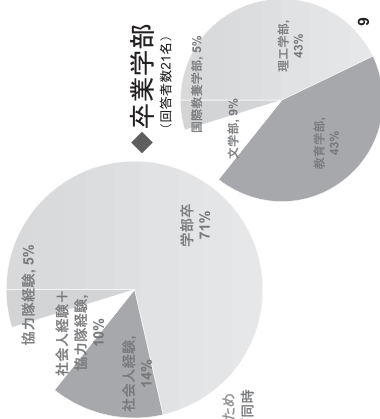
1. キャリアについて
 - 1) プログラムへの参加の動機を教えてください。
 - 2) プログラム参加前の学歴や経歴を教えてください。
 - 3) プログラム活動中に、卒業後の進路について考えたこと、実際に行った進路に関する活動があれば教えてください。
 - 4) プログラム修了後の経歴、学歴を教えてください。
 - 5) 今後の進路、就職(転職)、活動等について予定・計画していることがあれば、教えてください。
2. ザンビアプログラムについて
 - 1) プログラム修了後の進路先にて、ザンビアプログラムで学んだことで役立ったことがあれば教えてください。
 - 2) プログラム修了後の進路先や就職先を決めるに当たり、プログラム活動中に学んでおけばよかったこと等があれば教えてください。
 - 3) プログラムを振り返り、改善点、追加のオプショナル等の希望やアイデアがあれば教えてください。

3-1. 縦断的調査結果(活動前)

◆ 参加の動機 (回答者数21名)



◆ 参加前の学歴・職歴 (回答者数21名)

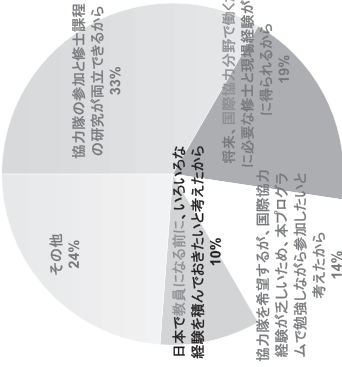


3-2. 縦断的調査結果(活動中)

- ◆ 卒業の進路について考えたこと、実際に行ったこと (回答者数21名)
 - ✓ 将来国際教育協力の分野で働きたいと考え、現地にいる専門家を増やした(国際協力実践家型)
 - ✓ 研究をより発展させるために、大学院博士課程を目指した(研究者型)
 - ✓ ザンビアでの教員経験を活かして、日本での教員を目指したいと考えた(学校教員型)
 - ✓ 民間企業での就職を考えた(民間企業就職型)
 - ✓ 卒業後の進路についてはあまり深く考えていなかった、もしくは、特別な活動をしていない

3-3. 縦断的調査結果(活動後)

◆ 進路、就職先 (回答者数18名)



◆ 今後の進路、就職(転職)等の計画について (回答者数18名)

- ◆ 今後の進路、就職(転職)等の計画について (回答者数18名)
 - ・ 卒業研究・授業分析の研究を深めたい。(研究者)
 - ・ 博士課程進学(2名)
 - ・ 当面は、このまま教員として活動していきたい、もう少し経験を積んでからもう一度大学院で勉強しなおし、いつか教育を十分に受けることができない子どもと関わってみたいと思っている(教員)
 - ・ JICA専門家や国際機関への就職・転職(4名)
 - ・ 専門家も機会があれば経験してみたいです。(研究者)

◆ 今後の進路、就職(転職)等の計画について (回答者数2名)

- ◆ 今後の進路、就職(転職)等の計画について (回答者数2名)
 - ・ 現職で、途上国の雇用を生み出せる仕事が出来れば、また、自分で起業し、新たな途上国のビジネスを生み出していきたいとも思っている。最終的には途上国の公教育とは一線を画した学校を作りたいなど考えている。(民間企業)
 - ・ NPO等の自己団体にて国際協力を行っていく(研究者)

- ◆ 今後の進路、就職(転職)等の計画について (回答者2名)
 - ・ 現職で、途上国の雇用を生み出せる仕事が出来れば、また、自分で起業し、新たな途上国のビジネスを生み出していきたいとも思っている。最終的には途上国の公教育とは一線を画した学校を作りたいなど考えている。(民間企業)
 - ・ NPO等の自己団体にて国際協力を行っていく(研究者)

3-4. 縦断的調査結果 (プログラムについて)

◆ ザンビア修了後の進路において、ザンビアで学んだことで役立ったこと

- ✓ 専門分野にとどまらない広い視点 (全般)
- ✓ 現場の視点と研究者の視点とを組み合わせることができたこと (全般)
- ✓ 国際教育協力への還元性 (国際協力実践型)
- ✓ 研究能力の向上 (研究者型 + α)
- ✓ 日本の教育現場への還元性 (学校教員型)
- ✓ 働く意味を考え直す機会 (民間企業就職、学校教員型)



3-5. 縦断的調査結果（課題について）

- ◆ ゼンプロ修了後の進路を決めるに当たり、ゼンプロ活動中に学んでおけばよかったこと
 - ✓ 進路や就職先に関する情報
 - ・国際協力の仕事の種類、各段階で求められる能力など、キャリアパスのについて考えることができた。
 - ・プログラム修了生を通して、進路の色々な可能性を知っておくことが重要。民間企業や就職活動についての理解も薄かった。巡回指導の機会も、進路相談も可能。
 - ・研究と協力隊活動の有機的な関連付け、そこで身についた能力の活用について
 - ✓ 基礎知識の強化
 - ・ゼンビアの歴史
 - ・日本の教科教育学、教育学一般の知識をもっと勉強しておけばよかった。

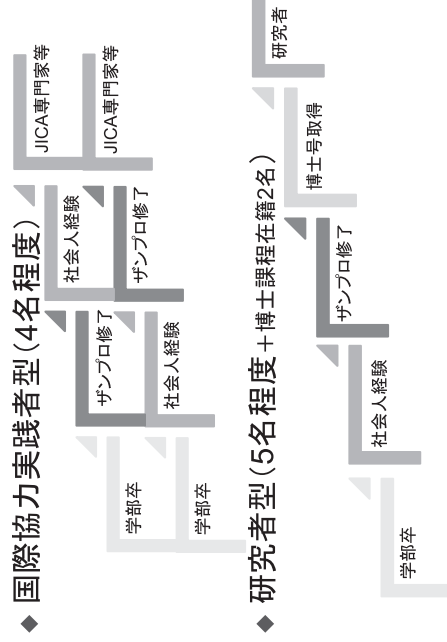


3-6. 縦断的調査結果（プログラムについて）

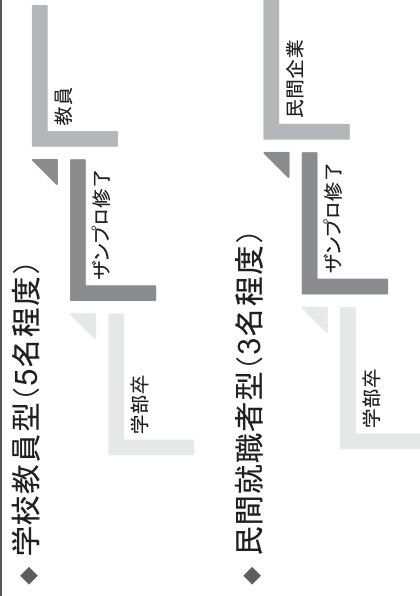
- ◆ ゼンプロを振り返り、改善点、追加のオプション等の希望やアイデア
 - ・将来の就職先を意識した情報提供
 - ・研究者、教育者、開発実践家など、個々の希望にあった活動(研究)内容を事前に提示できたら良い。
 - ・組織的なサポート・オプション
 - ・テレビ・Web会議でのゼミ参加や、研究論文の収集支援など。プログラムの拡大(他国や他職種)
 - ・ゼンビア以外の場所を希望していた(例:仏語圏)。
 - ・職種(青少年活動、村落活動など)の拡大。
 - ・広報強化



4. ゼンプロキャリア形成モデル



4. ゼンプロキャリア形成モデル





4. ザンビアキャリア形成モデル

まとめ

- ◆ キャリアを4つに類型化することができた
- ◆ ただし1つの類型のみならず、生涯学習の過程で他の類型に移動している例が、既にあり今後その可能性がある
- ◆ IDECとの関係を通じて、隊員時代のつながりを超えて、ザンビア国におけるつながりや世代間のつながりを形成している

17



5. 成果と課題－波及効果

プログラム以上の連携実績

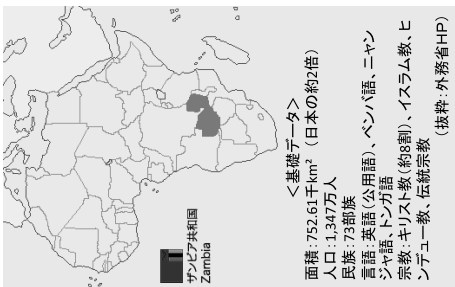
プロジェクトにおける中核人材育成への協力

- ◆ 広島大学で受託しているザンビアの国別研修の講師や、本技プロへの投入である短期専門家数名がザンビアプログラムの修了生ということもあり、ザンビアプログラムが国際協力の人材の成に貢献していると考えられる。
- ◆ 基礎教育カリキュラム作成への協力
- ◆ プロジェクトが支援するカリキュラム人材の育成に対して、ザンビア関係者の短期専門家としての派遣を通じて対象人材への技術移転を行うと共に、カリキュラムそのものの質的な向上に貢献している
- ◆ 教育省とプロジェクトが発行する研究雑誌への協力
- ◆ ザンビア教育省とJICAプロジェクト共同で発行する研究雑誌(ジャーナル)の定期発行に関して、ザンビア担当教員が査読委員として活動に加わったり、教員やザンビアの学生、卒業生が論文やレポートを投稿し、結果として論文集の質の向上に貢献している

18

発表内容

1. ザンビア共和国の紹介
2. プログラムの流れ
3. 派遣前
4. 派遣中(隊員活動)
5. 派遣中(研究活動)
6. 派遣後
7. 感想



2

1. ザンビア共和国



写真1. 伝統布「チテンゲ」



写真2. 主食「ジンジャ」



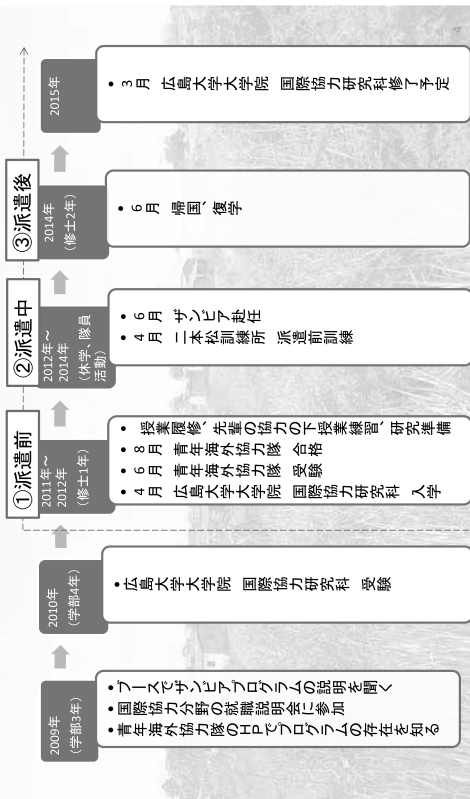
写真3. 鉱山



写真4. ビクトリアの滝

3

2. プログラムの流れ



3. 派遣前

①授業履修

②ザンブロ勉強会

③研究準備

ザンビアの現状を事前に学んだため、現地に溶け込み易かったです。

5

4. 派遣中(隊員活動-理数教科教師)

理科と生物の授業

教員対象Workshop

ソーラン節 in Youth Day

<その他>

- ・ 教師会
- ・ 補講
- ・ 日本の歌
- ・ PC教室
- ・ 小さなハートプロジェクト(貯水タンク設置)
- ・ 他の隊員やJICAのWorkshopに参加
- ・ 狐山社会科見学
- ・ 日本の小学校、高校の授業に参加
- ・ 出身地のHPに活動報告など

失敗も成功も今の私にとって大きな財産です。

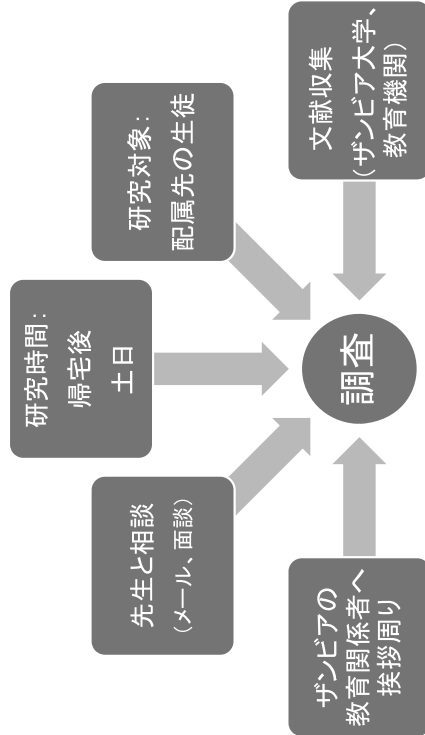
6

4. 派遣中(隊員活動-余暇)

毎日が新鮮で、沢山のザンビア人から人との絆と生きる力を学べました。

7

5. 派遣中(研究活動-個人)



8

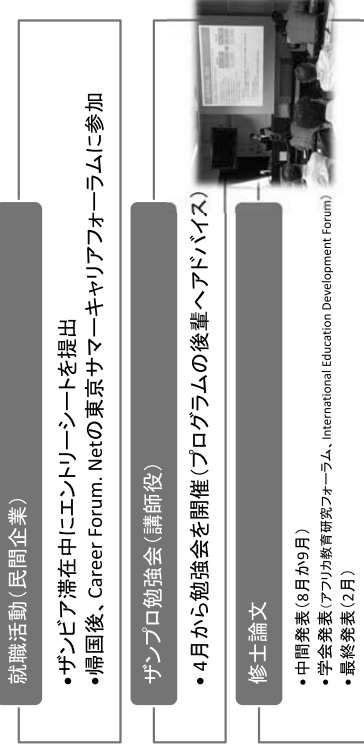
5. 派遣中(研究活動-Workshop)



先生からの励ましがあつたからこそ、研究と活動の面立を行うことができたのだと思います。

9

6. 派遣後



研究によってザンビア社会に貢献できるよう、日々取り組んでいます。

10

7. 感想

1. プログラムについて

- i. 先生や先輩から、研究、隊員活動、ザンビアの生活など、様々なアドバイスを頂ける
- ii. 協力隊の経験を基に、学術的に途上国へ貢献できる
- iii. 研究的視点を持つことで、隊員生活の中に新しい発見がある
- iv. 様々なザンビア人や専門家との出会い
- v. 充実した4年間



11

7. 感想

2. プログラムを通じた自己変化

- i. 途上国の現状把握
- ii. 外国の人との協調性
- iii. 世界から日本を捉える客観性

3. プログラムへの提案

- Skypeによるゼミや先生との相談



12

ザンビアプログラムでの活動

- ザンビアへの派遣期間：2005年4月～2007年8月（16年度3次隊）
- 任地：マザブカ（Kaonga Basic School）
- 活動：
 - 8, 9学年の理科・数学の指導
 - 郡教育事務所との連携
- 研究：「ザンビア後期基礎教育における生徒の文化的状況についての研究」
 - 「学び」の違い

5

ザンビアプログラムでの学び

- 現場感覚
 - 教育開発／教育政策において、「教室で何が起きているか」は思っているより重視されていない。（例：雇用対策の一環としての「教育」）
 - ドナー－会合等でも教室で起きている事を念頭に置いた議論がなされることはほとんどない。
 - ザンビアで身につけたミクロの視点は、マクロの議論をする際の大きな強み。
 - 現場の専門家への助言。

6

ザンビアプログラムでの学び

- 現場で起きていることを一般化する目
 - JICAの技術協力は良くも悪くも「盆栽」。
 - 政策→現場
 - 現場の知見→政策



7

現在の仕事

- ABE (African Business Education) イニシアティブ
 - 対象：アフリカの若者（5年間で1000人）
 - プログラムの概要：日本での修士課程＋日本企業でのインターン
 - 日本企業のアフリカビジネスの「水先案内人」を育成。
 - ※「ビジネス現場」
 - ＋「修士課程」



8

今後のキャリア

- 興味・関心
 - 「国」の枠組みを越えたい。
 - 「産」「学」「官」の枠組みを越えたい。
 - 援助一被援助の関係から真にWin-Winの関係を目指したネットワークの構築。
 - ODAの限界。
 - 日本の「開発」。
 - 家庭の平和。育児。



9

今後のキャリア

- 強み：
 - 基礎教育、技術教育・職業訓練、高等教育、障害者支援、平和構築、IT等幅広い経験。(横)
 - 協力隊、学校運営、地方政府、実施機関、省庁、ドナー一国会合等幅広い経験。(縦)
- 弱み：
 - 偏った経験 (JICA)
 - 専門性の薄さ
 - 年齢



10

今後のキャリア

- JICA関係
 - 専門家 (業務調整)、特別嘱託、専門家 (業務調整以外)、国際協力専門家、職員等
- 開発コンサルタント
- 国際機関
- 大学職員
- 進学
- 民間企業
- 主夫



11

ご静聴ありがとうございました。



12

質疑応答

Q：畝と申します。国際協力機構の研究所の所長をしております。本日は、2つのプレゼンテーションを非常に興味深く聞かせていただきました。馬場先生が中心となり、地に足の着いた大学院教育をされていることが本当によく分かりました。

1つ目の質問は、最初にご発表いただいた竹内さんの現在取り扱っている研究テーマを可能であれば具体的に教えていただきたい。

2つ目は、竹内さんと辻本さんに共通ですが、現場で研究活動をされる時の課題、どういうところに苦労されたのかを教えていただきたい。

3つ目に、発表者の方で家庭訪問をされ、その結果を論文や研究に反映されていると思いますが、私どもの研究所でも研究を行う際に、プライバシー等の取り扱い、つまり研究倫理の問題にぶつかります。そういった場合、広島大学大学院として倫理面での担保をどのように対応されているのか、例えば、研究倫理委員会にかけられているなど、具体的な取り組みを可能な範囲で教えていただければと思います。

竹内：最初の研究テーマについては、ザンビアの中等理科教育における授業の効果について研究をしています。私は、認知的領域と情意的領域の両方の側面から生徒の実態を探っています。

2つ目が、研究で苦労したこと、協力隊活動での苦労ですか？

Q：協力隊活動中に研究をされたので、いろいろな制約の中で研究をされるわけですが、苦労されたことがあれば教えていただきたいと思います。時間が足りないというのは当たり前ですが、他に何かあれば、教えていただきたい。

竹内：生徒については、私が先生という立場なので、テストを実施したり、アンケートを実施したりする時は、すんなりと受け入れてくれたのですが、同僚の先生は、私の研究に協力してほしいとお願いした時、最初少し抵抗がある様子でした。その後、この研究の意義を説明し、私はどのようなことをしてザンビアの教育に貢献していきたいという話をしたところ、理解をしてくれるようになっていきました。

辻本：現場の研究活動で苦労したことについて、竹内さんがおっしゃったところは、私も同じように苦労しているのですが、一つ思い出すのは、やはり現地にいると文献の読み込みなどが全然できなかったことです。目の前にあるもので精いっぱいになってしまい、先生方からいろいろご支援は頂いていたのですが、なかなか深めるところが難しかったです。

あと同時に、協力隊活動をやりながら研究活動をするということで、馬場先生の発表

の中でもあったのですが、活動を一生懸命にやればやるほど、目の前に子どもたちがいて、彼ら、彼女たちを何とかしてあげたいという気持ちが前に立ち、なかなか研究活動を進められなかったところがありました。

そこにも関係するのですが、私の場合は自分の生徒たちを直接研究対象としていたので、協力隊員の立場として、彼らを教えて何とかしたいという気持ちがある反面、同時に、彼らを研究対象として見ることの心理的なつらさは持っていました。

また、竹内さんもおっしゃいましたが、協力隊で入るときは、一教員として学校に配属されますので、やはり一教員として生徒に対して授業をすることはできても、そこを超えて何かをするとすると、特に私はプログラム初期だったこともあり、周りの理解を得るのが難しいところはあったかなと思います。

家庭訪問の話も出てきているので、倫理のところでも私も少しだけ申し上げますと、研究倫理のようなところは、もちろん指導の一環として先生から受けておりました。私の場合は生徒に対して、私はこういう研究活動をやっています、この家庭訪問はその中の一環としてやっています、ここで聞いたことを紹介したりもしますと説明しました。このプログラムならではのところもあるとは思いますが、日常的に教員として入っているの、生徒との信頼関係といったところは構築できており、そういう意味では生徒も喜んで協力をしてくれたかなと思っています。

司会（中和）：ありがとうございます。

3番目の研究倫理については、馬場先生よりご回答がございます。

馬場：大事なものは、目的を説明して、関係者がその目的を理解していることが一番大事だと思います。

それに加えてということで、若干説明させていただきますが、実はオーストラリアのモナシュ大学と関係がありまして、モナシュで聞いた話です。モナシュ大学では、例えば質問用紙などを作り、倫理委員会だったと思いますが、そういうところにかけて、質問用紙の内容や表現の仕方などをチェックされて、その上で、現地調査をする時には、個々の質問者、質問に回答する方の保護者からサイン、一筆をもらえというのがオーストラリアの大学の方針です。

ところが、それを実際にやろうとすると、保護者は一筆を書くということをしごく負担に感じる。先進国の感覚としての倫理観と、彼らの社会の社会的通念とがぶつかり合う部分だと思います。だから、一方的に先進国のある意味で自己満足で研究倫理を追究することが本当に本質的なのかというと、説明責任が一つあると思います。

もう一つ、これはしごく痛くて、それ以降は気を付けているのですが、プログラムが3年、4年たった頃、現地へのフィードバックはないのかと言われました。修士論文は日本語で書かれていたので、それ以降は、論文本体全部を英訳するというのはできない

ので、少なくとも英語でサマリー、その概要に当たるようなものをできるだけ英語化し、現地へフィードバックをするようにしており、これはすごく大きいかなと思います。

つまり、実際に調査を行う時には、まず目的を説明して、その理解を得るということと、データを取って分析し、その結果を出した後、それを英語にして説明するということを現地に対しては行っています。

また、博士課程前期の間はザンビアプログラムに参加していますので、協力隊という身分で調査をしているのですが、博士課程後期に進学し、現地調査を行う場合は、協力隊員という立場ではありません。協力隊員として活動している時の教え子や関係者が調査対象ではないので、その場合は、広島大学からザンビア教育省の次官に対して、研究の目的、機関、調査内容等を説明したレター（許可申請）を書き、サインをもらっています。ですから、そういう意味での許可をザンビア教育省から得ています。

Q：プレゼンテーションをありがとうございました。兵庫教育大学から来ました、薄田と申します。将来は、このザンビア特別教育プログラムに参加しようと考えている者で、竹内さんのように将来この場に立ち、ザンビア特別教育プログラムに貢献できるような人物になろうと思っています。

馬場先生に質問が2点あります。

まず1点目が、スライド14ページの所で「職種の拡大」と挙がっていました。私は理数科が専門ではなく、どちらかと言えば文系で、中高の生物や化学などを英語で教えることに不安があります。仮に私が広島大学大学院に入学した場合、その時まで、例えば小学校教員等の職種の拡大の可能性があり得るのかということが1つです。

もう1点はお金に関するところで、大学院と2年間の青年海外協力隊に参加することにより、通常の大学院修了にかかる費用とは他に金銭的な負担があるのであれば教えていただきたいと思います。お願いします。

馬場：実は長い間挑戦し、なかなか越えられなかったハードルを、今、越えようとしています。それが成功するかどうかは、まだ結果が出ていないので、越えましたとは言えないのですが、少なくとも越えようとしています。それは小学校教育です。これまで追っていた職種拡大の可能性は、小学校教育と青少年活動、村落開発普及員です。

青年海外協力隊事務局の関係者がおられるのであれですが、広島大学としては、中核として理数科教育を中心に置き続けて、今後も置き続けるというのは、そのように約束していると理解しています。しかし同時に、実際、広島大学の募集説明会などに行くと、あなたの様に、他の職種はないのですかと言われる場合もあるので、今後できれば、そういう意味で拡大を考えています。

ただ、私たちが行きたいと言える部分と、青年海外協力隊のシステムとして、現地から要請が挙がらないといけない、現地から要請が挙がらないのに私は小学校教育で行

きたいとは言えない、そういうところがあるかなと思います。ですから、小学校教育を含めた他の職種でニーズがあって、実際にそこを受けるという意味で、拡大の可能性はあると言えます。

また、お金のことですが、協力隊で派遣されている期間、青年海外協力隊の国内積立金という制度があることをご存知ですか。正確な金額までは分かりませんが、ある程度の金額が国内積立金に積み立てられますので、実際、うちの学生などを見ていると、最初は保護者の方の支援を受け、青年海外協力隊から帰って来た時には、自分の積立金を使って学業を続けている場合が多いように思います。

Q：ありがとうございます。大阪大学で教員をしています小峯と申します。私自身も院生の短期の海外派遣を担当しております。

お尋ねしたいのは、現地でのリスク管理や安全対策についてで、広島大学としてどのようなご指導をされているかということと、竹内さんや辻本さんには、実際に現地での活動中に、安全面でどのようなトラブルに直面されて、どのように切り抜けたといった事例がありましたら教えていただければと思います。

辻本：基本的に、これはプログラムとしてというよりは、JICAの協力隊員としてザンビアに派遣されることになりますので、他のJICAの協力隊員と同じような安全管理、リスク管理を受けることになります。実際に協力隊の派遣前の研修で、安全管理に関する講義は受けますし、ザンビアに特化した講義も受けます。現地に行ってから、JICAザンビア事務所から同じように安全管理の話を受け、JICA事務所の責任として協力隊員の安全管理を見てもらっているのも、特にプログラムとしてというよりは、JICAの協力隊員の安全管理に従っていると思います。

竹内：私もJICAの安全管理の下で支援をして頂きました。実際に、私が住んでいた家の近くで強盗がありました。それをJICA事務所に連絡したところ、急遽引っ越しをし、より安全な場所を確保していただいた経験があります。

馬場：今のことに関しては、それ以上言えないのが正直なところですが、ただ、ザンビアプログラムとして派遣されている間は、大学の関与はもちろんありますが、むしろ公的には青年海外協力隊の枠組みに入っています。もちろん大学として気を付けるようにという指導はしますが、基本的に協力隊の枠組みに乗っかっていると思います。

博士課程後期の学生で、現地に調査に入る場合には、メールなり携帯電話で常に連絡は取れるようにしなさいという連絡先の確保と、できるだけ保険に入るようにというかたちで指導をしています。その2点です。

第二部
シンポジウム

シンポジウム

テーマ：今後の協力隊×大学院教育の連携の可能性について
司会：広島大学大学院国際協力研究科 教授 馬場 卓也
シンポジスト：北海道教育大学函館校 国際地域学科 講師 石井 洋
広島大学大学院国際協力研究科 教授 清水 欽也
関西学院大学 国際学部 国際学科 教授 關谷 武司
JICA 青年海外協力隊事務局 次長（国内業務担当）山田 健

司会：馬場

<スライド1：シンポジウムを始める前に>

始める前ということで、若干スライドを用意しましたので、それについて簡単に説明させて頂いて、シンポジストの方々にコメントを賜りたいと思います。

<スライド2：前回のシンポジウム（2009）での課題>

まず、シンポジウムを始める前ということで、前回2009年のシンポジウムの最後に何が課題になったかから始めたいと思います。この4点が挙がりました。最後の部分は、いかに成果を発信するかということですので、これについては、基本的に今回は対象にしないでおこうと思うのですが、最初の3点は結構似ているかなと思っております。

こういうプログラムを通して、どういう力が育ったのか、育てたいのかというのが1番目のポイントになろうかと思えます。

それと関係すると思うのですが、これまで研究は座学中心だったのに対して、国際協力分野というのは、やはり実践あつての分野だと言えらると思います。ただ、実践だけでいいのかと言えば、そうではなくて、実践の背景にある研究を想定しないとイケないと思います。

実際、学生達はかなり苦勞して、最初の半年間で講義も受けながら、研究の種になる先行研究を、一生懸命、図書館の資料などをコピーし、現地に持って行きます。そして、現地では、持って行った資料の大半は使えず、こういう情報があればいいなという状況になることもあり、なかなかそこにはジレンマがあります。

「実践と研究の関係性」というのは、プログラムを通して育てるべき能力とも関係しますし、次に述べる「プログラムの制度」は、そういうプログラムを通して、こういう能力を育てたいけど、そのためにはどうというプログラム制度にしていけばいいかということ、これが3番目の点です。この点について、基本的には、



これからお話をしたいと思います。

ただ、話し方として、1番について、2番についてというより、育てるべき能力、もしくは実際の発表を聞いて頂いて、どういう能力が育っていると言えるのかということと、そのためにはプログラムの制度をこのように変えたほうがいいのか、こういう制度があったから、こういう力が育ったのではないかといったことを、話していきたいと思います。

<スライド3~5：育てるべき能力>

国際協力実践者、研究者、学校教員、民間就職者に関して少しレビューしてもらい、各職種で実際に育てるべき能力として挙げられているものを再確認しています。

専門的な知識は当然必要ですよ。私は数学教育ですが、数学教育の理論は当然あってしるべきだと思います。でも、それだけ持っていればいいのかとえば、その理論の背景に実際の教室やいろいろな場面で問題を見つけ、それを解決していくといった意味での問題発見・解決能力、もしくは現実と向き合いながら、その中で研究にできる部分を拾い上げながら、いかに研究していくかといった部分が2つ目です。

そして3つ目、そういうことを全て実際に行っていくためには、コミュニケーション能力がすごく大事で、これはかなり多く挙げられておりました。それらを行っていく上で、職業使命感という倫理観、先ほど倫理の話がありましたが、そういうことが背景にあるかなと思います。「その他」と書きましたが、これは1つ挙げられていた「豊かな感性」が必要ではないかということでした。

<スライド6：縦断的調査からのカテゴリー別能力(1)>

それを、「国際協力実践者」「研究者」「学校教員」「民間就職者」の類型に分けて、縦横のマトリックスで整理したものがこれです。本日は、これについて個々の項目を説明するのが目的ではなく、このような類型整理ができることが分かったという説明です。

<スライド7：縦断的調査からのカテゴリー別能力(2)>

例えば、「職業使命感」で「国際協力実践者」の所に書いていないのは、国際協力実践者の職業使命感が必要ないと言っているわけではなくて、今回たまたまレビューしたデータの中で、そこに挙げられていなかったという事実をまとめております。

<スライド8：縦断的調査からのカテゴリー別能力(まとめ)>

「専門的知識」は、一様に必要だと挙げられています。当然と言えば当然で、これは個々のものを論じるよりも、おそらく共通して必要な部分であろうと思います。それに加えて、それぞれの類型の中で特に重視される部分がどこにあるのかではないかとは思っています。

それがどこなのか、たまたま今回のデータで現れてきたのは、こういう部分が多くありました。「研究者」は、先ほど言いましたように「豊かな感性」と挙げていますし、「実践者」や「民間就職者」は、「社会性、協調性、コミュニケーション能力」が特に重視されているということで、そういう意味では類型の特徴が現れているような気がします。

<スライド9>

それで、先ほど冒頭で述べました、この3つの点を中心に議論したいと思います。限られ

た時間ですが、できるだけ多くの方にご意見も頂きたいですし、そこから何か得て帰って頂きたいので、最初は、それぞれのパネリストの方にご意見を頂こうと思いますが、その後、フロアをオープンにしますので、ぜひご参会の皆さま、積極的にご意見、ご質問をいただければと思います。

私がパネリストの方々を紹介してもいいのですが、むしろ、それぞれの方に自己紹介を兼ねて、前半部分の感想ならびにこの辺りについて、まず数分程度でお話を頂きたいと思います。全てをカバーして頂くなくても結構ですので、自己紹介と、簡単にご意見等を混ぜてお話しください。

シンポジスト：山田

JICA 青年海外協力隊事務局で、こうした大学連携等を担当しております山田と申します。

今日、お三方の発表を伺ってしまして、非常に大学連携案件の中でも老舗の案件、そして長く続いているだけのことがあるなど率直に感じています。それは、派遣されている方々の能力も加えながら、バックアップをしている大学の方々の支援体制がしっかりされていると思っております。先ほど、個人的に質問して、なぜ休学中なのに、こうやって先生たちのサポートをされるのかと聞いたら、いや、きちんと授業料を払っているから大丈夫ですということでしたので安心しましたが。

今日聞いていて思ったのは、やはり大学院生ですから、研究者として参加していただくということで、ここではザンビアですが、途上国における理科教育、教育における問題点を特定していただき、それをどのように対応していけばいいのかという部分を一般化することが、やはり必要なのだろうと思っております。

加えて言うなら、一般化されたものを英文で発信していただく。私たち JICA は、いろいろな各国においてドナー会合があり、いろいろな国との援助協調ということで、違う国が同じことをしないように役割分担をするわけですね。それから、教育分野をどのように行っていけばいいかを言っていくわけですが、やはりどうしても日本人は、その辺の発信する力が少し弱いということが言えます。

それから、欧米系、アメリカ辺りのコンサルタントの方は、分厚いレポートを残して、これで一つキャパシティディベロップメントをやったということで満足して帰られるわけですが、それは実際使われない。日本人は、きちんと寄り添って支援を行っていくことで相手の力をつけていくことを行っているのですが、そういういいことはなかなか伝わりにくいのですね。日本人は、なかなか自分を表に出さないという、ある面でいい性格ですが、ある面で発信力が弱いなというところですね。

ですので、こうしたプログラムで得た知見を、ぜひ英文にして、先ほど論文は英文化しないということでしたが、それを相手に渡す、あるいはドナー会合の場で、こういう現場ではどんなことが行われている、ここが問題だと発信していただくといいのかなとは思っています。そういう意味で、実践が研究ですということだと思えます。

私のような技術協力原理主義者からすると、研究のための活動というのは少し困るなど思ったりしますが、その辺はうまく進めていただければいいのかなとは思いますが。以上です。

司会：馬場

ありがとうございました。

1点だけ確認させていただきたいのは、修士論文本体を全部英語化することはないのですが、実は2年間の活動の過程で、ザンビア大学で現地の大学の先生や教育省の方も参加されるワークショップを行っており、そこでは全てうちの院生たちは英語で発表しております。最終的なプロダクト（成果品）としての修士論文そのものを英語化はしていませんが、できるだけ英語化を進めていきたいと思っておりますので、そういう文脈で捉えまして、それはぜひ努力はしていきたいと思っております。ありがとうございました。

シンポジスト：清水

私は、広島大学大学院国際協力研究科で教授をしております清水欽也と申します。私の専門は理科教育です。

実は、そもそもここに座っている人で、青年海外協力隊を経験していないのは、もしかしたら、山田さんを除けば私だけではないかと思っております。ですから、もしかしたら違うかもしれませんが、馬場先生や關谷先生、石井先生にとっては、ザンビアプログラムは、後輩を育てるというイメージがあり、自分の時との比較とか、こうなるはずだという形で、もしかしたら、知らず知らずのうちに要求度が高くなっているかもしれない。その点から言えば、私はアメリカに留学していたので海外経験は結構長く、ある種、このプログラムの、完全に傍観者ではないですが、学生に付いた力という点では、少し傍観者的に見られるところがあります。

その観点から言いますと、最初のプログラムを通して育てるべきというか、育ったと思う力は実は幾つもありまして、第一に挙げられることが洞察力。現場の実践に根付いた、ザンビアの教育に関する洞察力は確実に深まっているだろうなと実感します。

それを如実に示しているのが、先ほどの竹内さんの発表の中で、「最初はなぜこんなことをするのか分からなかったけれども、だんだん分かってくるようになる」とありました。これは、少しずつザンビアの教育に対する見方が分かってきて、それがどんどん深まっていく過程を示しており、なおかつ、その中でまた新たな問題を見つけて、それを自分の意識的か無意識的か、どんどん解決していく過程を如実に示した言葉ではないかと思っております。

あと、辻本さんの現場の感覚も、現場において培った知識をもとにして、深い洞察をし、それがあからこそ、辻本さんご自身の固有の問題を見つけていくということが言えるのではないかと思います。

さらに、私が観察していていつも思うのは、調整力ですね。これはJICAの現地事務所のお力も借りての話ですが、現地の教育省の局長とか課長クラスに、日本の大学院生が行って、

ああしてください、こうしてくださいと言う。ここに頼めば、この話を通るだろうというのは、一般社会で言えば、普通に会社員に要求される力ですよね。それを普通にこなしている。この力は、ある意味、私から見るとすごくうらやましいなと思っています。

さらに企画力。現地では、今でもやっているのかな。いろいろな学校を回り、その実験を見せたりするような活動、ロジスティックな能力も含めて、自然と培われている。行った本人がどれだけ理解しているのかどうかは分かりませんが、少なくとも協力隊を経験していない、なおかつ学生を育てるという立場から見たら、こういうものが非常によく見えます。

先ほど、5つの力というものが、ここに出されました。社会人に必要とされるべき能力。専門知識とか問題発見能力、社会性、職業使命感、豊かな感性。

この内、専門的知識に関しては、ある程度、大学の責任だと思います。ところが、現地の活動を通してこそ得られている力、先ほど言った洞察力というのは、おそらく問題発見力、あるいは解決力に対応するものであり、なおかつ調整力は社会性とか協調性とかコミュニケーション能力に関わってくるものだと思います。

職業使命感については、私は日本人に関してはあまり心配していないのですが、時にはJICA職員からインプットを受け、なおかつ、我々のザンビアプログラムを支えてくれるという使命感を、彼らは常に持ってくれています。先輩の期待、あるいは後輩にどうつなげていくかというところは学生生活を通じて端々に聞き取れます。なおかつ、それらを包括した形で豊かな感性が培われているのではないかと思います。



こういうものを受けて、われわれ送り出す側がどういうことを気を付けるべきなのか。せっかく培ってきた深い洞察力、豊かな感性など

を、どう我々の持つ専門知識でラベル化して、言語化していくか。先ほど、伝える力というお話が山田さんのほうからありましたが、我々大学人が彼らに与えなければいけないのは、彼らを感じたその言葉、言葉にならないものを、どう言語化させていくか、その中で知見を蓄え、それをいろいろなところに発信していく、あるいは議論にしていくツールにすべきか。こういうところを、大学のほうは培っていくべきではないかと今のところは考えています。

シンポジスト：關谷

関西学院大学の關谷と申します。よろしくお願ひします。

まず、私の自己紹介ですが、広島大学を卒業した後、大学院の修士課程に進みました。修士課程修了後は、協力隊員として3年間中米に滞在し、博士課程へ進学するため日本に戻りました。そして、博士号を取った後は大学の教員になりました。

大学の教員をやりながら NGO 活動等を行っている、JICA より依頼があり開発計画の専門家として開発途上国へ派遣されることになりました。開発計画専門家では、教育分野のプロジェクト立案という業務を行い、プロジェクトの立ち上げ準備を行いました。立案後、そのプロジェクトの実施支援の依頼を再度受けて、プロジェクトのリーダーとして派遣されました。その後、日本に帰国したのですが、更にプロジェクト評価支援の依頼を受け、非常に珍しいケースだと思えますが再度、プロジェクト評価の専門家として派遣されました。

帰国後、大学への復帰を試みましたが、簡単には戻ることはできませんでした。というのも、在外派遣中は、学会発表などを行うことができなかつたからです。そこで、しばらくの間は教育分野に特化したコンサルタント会社を起業し、5年ほど会社経営を行いました。

その後、大学教員に戻り、現在は、国連ボランティア計画と本学が協定を結び実施している学生ボランティア派遣に関するプログラムを担当しております。

まず評価というテーマを頂いたのですが、最初に、このプログラムのものですが、13年間も続き本当に素晴らしいと思っています。僕がこのザンビアプログラムで素晴らしいと思いますのは、研究の視点を持った現場の実施者、あるいはその逆で現場の実践の視点を持った研究者を育成していることです。そういった人材が本当の意味で育ってくるまで、もう少し時間がかかるとは思いますが、もう既にその効果が少しずつ出ているということが素晴らしいと思います。

日本だけではなく、世界全体の国際協力を見てみた時に、国際協力というのは失敗の連続だと言っても過言ではないかもしれません。多くの援助機関が、事業に失敗した後、あまり反省しないで、新たなアイデアを出し、また次ということを繰り返している気がします。

しかし、プロジェクトにしる、プログラムにしる、きちんと調査と評価をする視点は非常に重要だと思います。私は、自分がプロジェクト運営の実践に関わる前に、たまたま研究系の仕事に従事しておりましたので、プロジェクトがうまく行っても、行かなくても、その結果の要因を追求しなければいけないという視点を持っておりました。そのため、プロジェクト開始当初からプロジェクトの定点観測を行っていました。そして、そのデータは、その後非常に役に立つことになります。

しかし、普通、現場に出る実践者は研究者の視点を持っていないことが多く、逆に研究者で現場を訪れる人は実践の経験がない人が多いと思います。ですから、研究者の側は、実際に現場で起こっている問題が明確に見えないケースが多く、更には、その国の言葉や文書化されていない背景を深く理解できていないため、収集したデータを正しく解釈できていないこともあります。ですから、実践者と研究者のリンクは極めて重要だと思います。研究にとっても大事ですし、実践者にとっても大事だと思います。

そういう意味で、このザンビアプログラムを経験した人たちが、実践者になる、あるいはさらに研究者になる、学校現場に帰られる方もいらっしゃるということで、教育にも研究や実践の視点が活かされるのは非常に素晴らしいことだと思います。

一方で、事前の打ち合わせの時に馬場先生に少し話をさせてもらったのですが、「そのよ

うに素晴らしいプログラムをされているのですか。では、そのプログラムを通して、どのような学生が育つのですか」とすぐに聞かれます。しかし、人間というのはものすごく長いスパンで生きていきおり、このような人材育成のプログラムは、簡単に結果が目に見えるようなものではないので、あまり評価を急ぐべきではないと思います。

例えば、大きく2つの考え方ができると思います。1つは、いわゆるキャリアパスのような考え方で、仮にそれを評価だと言うとすれば、JICA やコンサルタント会社に就職しました、そのためのキャリアパスはこうでしたと言えるかもしれません。

実際、国際協力の市場は、そのキャリアパスがないというのが問題でした。我々が途上国の現場で業務を行っていた時などは、まさにそのような時期であったと思います。馬場先生も、フロンティアランナーとして走られ、今ここに大学教員として座っていらっしゃいますが、それ以前は、キャリアパスをどのように進めるかが課題だったのではないかと思います。

そのような時に JICA は、よい人材を採りたいが、待っていてもそのような人材が育たないという考えから、ジュニア専門員制度¹を整えられました。また、外務省であれば JPO 派遣制度²を作り、日本人の人材が国際機関で働けるような機会を設けています。今ではコンサルタント会社も、若手コンサルタントを育てる制度を作っています。

しかし、そのような取り組みがなされているのに、この市場に入っていく優秀な人間はなかなか増えない。それは、キャリアパスの問題ではないからだと思います。例えば 1990 年代に ODA (Official Development Assistance, 政府開発援助) が 1 兆円位投入されていたのに、今では半分以下になってしまい、市場はどんどん縮小しています。そのような状態の中で、育った人材がどこに行くのかというと、なかなか行き場がないのが現状です。そうすると、日本のように、他とは違う生き方が精神的に厳しい社会の中で、集団就職などではなく、一人だけアウトローの生活をするのは、両親や親類からでさえ、理解を得るのが難しいと思います。そのように精神的に厳しい状況になることが想定されている中で、我々大学の教育者にとっては、優秀な人材をこのような状況の業界へ進むように支援するのは、大きなテーマだと思います。

今申し上げたことは、いわゆる経歴を構築するという意味でのキャリアパスを評価するというお話で、関西学院大学では、そのようなキャリアパスを評価の対象とはしておりませんが、人間を育てる、人材を育てるという側面で考えると、いろいろ視点は出てきますので、そのような視点の中で、我々は何を考えるべきなのかと考えております。

学生によく話しをするのですが、歴史を振り返ると、世界の貧困の格差を拡大し、世界を不幸にしているのは先進国であることは明らかである。君たちは、少なくとも死んでいく、

¹ ジュニア専門員制度とは、開発途上国・地域等における開発援助の専門知識と一定の活動経験を有し、将来にわたり国際協力業務に従事することを志望する若手人材を対象に、主に国内において JICA 事業を実地に研修する機会を提供するもの。

² Junior Professional Officer 派遣制度とは、将来的に国際機関で正規職員として勤務することを志望する若手邦人を対象に、日本政府が派遣にかかる経費を負担し、一定期間各国際機関で職員として勤務することにより、国際機関の正規職員となるために必要な知識・経験を積む機会を提供するもの。

搾取される貧しい人たちではないので、世界を貧困から救う可能性があるのは、まさに我々であり、君たちだよねという話をします。その後、世界を救う、有力かつ、もしかしたら唯一の可能性は、我々や君たちが、世界はどういう現状なのか、どうしてこうなったのかをしっかりと理解する必要があるし、生まれ育った環境が世界の常識ではないし、世界標準は先進国ではないことを体験的に理解することではないかと話します。ですから、このような人材育成のプログラムに実施するにあたり最も重要なことは、自分の頭で考えて、自分の足できちんと歩ける人を育てることで、プレゼン資料の中でいう職業使命感や価値観にあたると思います。

そのように考えると、広島大学は、このプログラムの目的の所にあるように、高度専門職業人を育てなければならないという使命があるので、大学教員とか大学職員、JICA 職員や教員になることのみを評価対象にするのではなく、どういう大学教員、JICA 職員、教員になるのかを評価対象として考える必要があるのではないかと思います。

例えば、研究者を例に取ってみます。まず、ご報告にもありましたが、現場の実践者はとにかく忙しいです。そうすると、実践者を助けるべく研究者が貢献できることはたくさんあります。しかし、残念ながら実践者とのコネクションがないせいか、現地のニーズにあまり合致していない研究を見受けることもあります。また、現地の人たち、または長期滞在している実践者・協力隊員であれば分かることが調査内容の大半であったりすると、実践者から情報を入手すれば、一段深い調査ができるのではないかと残念に思うこともあります。そのような意味で、本プログラムを終えた人たちが研究者になった場合、そのような関係が理解できることから、研究レベルが高くなるはずだと思います。

このように考えるので、例えば、どのような大学の先生になったのか、このプログラムを終えた人の研究テーマはこのような傾向がある、このような研究ができる、あるいは、このような内容の講義をすることができる



といった、中身も評価対象になりえるのではないかと思います。もちろん、その場合は、時間が必要であると思いますが、方向としてはそうではないかと考えています。随分話が長くなりました。申し訳ありません。

司会：馬場

ありがとうございました。また後ほど、今いただいた辛口の部分を広げて検討させていただきたいと思います。

では、石井さん、よろしくお願いいたします。

シンポジスト：石井

北海道教育大学函館校の石井と申します。私はザンビアプログラムの修了生という立場で、ここにおります。

簡単に、私の自己紹介をさせていただくのですが、私は実は現職の小学校の教員で、このプログラムに参加しました。教育大学を卒業して、すぐに小学校の教員になり、海外に関心があって、このプログラムに参加する前に、既に青年海外協力隊の18年度1次隊でブータンへ小学校教員として行っておりました。

もちろん私は、小学校教員の経験があったということで、ブータンですごく貢献できるのではないかと感じて国際協力の場に入ったのですが、そこで思ったほど効果を上げられなくて、もっと国際協力の専門性を高めたいと思い、広島大学の門をたたいて国際協力研究科(IDEC)に入り、このザンビアプログラムに出会ったという経緯です。

私の経験から、今のキャリアパスという話もさせていただきたいのですが、2回目の協力隊でザンビアに行かせてもらったということで、ブータンでの体験と、ザンビアでの体験を相対化して見たところからお話をさせていただきたいと思います。

ザンビアプログラムは本当は協力隊派遣は2年ですが、私は現場の現職の籍を置いたまま行ってしまったので、他のザンビアプログラムの修了生とは違うのですが、短期ボランティアで6カ月間、青年海外協力隊としてザンビアに行きました。

その6カ月間は、小学校教員の現職と、青年海外協力隊の理数科教員、広島大学の大学院生という3つの立場を同時に体験しながら、このザンビアプログラムを経験しました。JICAの方には、そんな人は初めてだと言われましたが、おそらく今でもそんな人はなかなかいないと思いますが、そういう教員経験からもザンビアプログラムのことをお話しさせていただきたいと思います。

まず、ザンビアプログラムでザンビアに行った時に多くの方に会った印象として、非常に課題意識が高いということを感じました。やはり研究する目的がはっきりあって、どういうことを考えていくか、どうしたらいいかを常に意識している。私はブータンでも隊員経験があるのですが、ザンビアプログラムに参加した方は、すごく意識が高いですし、非常に優秀な人、自分を優秀と言っているようで嫌ですが、自分もそのザンビアプログラムの一員で、そういったところが他の青年海外協力隊の人たちとは違うということがありました。

その一方で、すごくやるべきことが多すぎてストレスになっていると感じる面もあり、その辺がこのプログラムに参加された方の難しいところだったのかなと思います。

現場経験と研究の両方を積めるというこのプログラムですが、実際、現場経験では、私からすると少し中途半端な形を感じたのが正直なところですが、要するに、日本で一度も教師をやったことがない人が、ではザンビアに行って、いきなり教師として働いて、それが本当に向こうの貢献につながるのかということです。

実際、私たちもザンビアプログラムの前に勉強会を開き、どのように教えたらいとすごく勉強するわけですが、それであっても、やはり実際の子どもと対峙したときに、果たして

教育力としてどうなのかという点、専門知識という部分では、かなり不足しているのではないかと私は思っています。

今思うと、全てに専門知識がかかってきており、国際協力の実践者として私も青年海外協力隊を経験し、今は研究者、大学院生でもあり、学校教員でもあったというところ、全てにおいて専門知識は非常に重要なのではないかと。このプログラムに参加された人が、もし、なかなか次のステップに行けないとしたら、その専門知識なのかなと、私は今、思っているところです。

そういったところもありますが、研究力として感じたことは、実践を研究にするところ、私はすごくいい面だと捉えています。もちろん、私は現場の教員として働いていて、今、研究職に就いているわけで、やはり言われるのは実践と理論の融合であり、このプログラムの実践と理論の融合を意識した研究をしているわけですが、そういったところで、このプログラムは有意だと思いました。やはり、いかに貢献するかを研究のベースとしているというところで、そこが、他の研究者と、このザンビアプログラムに参加した方の意識は違うのではないかと私は思っています。

私は日本の授業研究をザンビアでしていますが、そこでなぜうまくいかないのだろうかとか、どうしたらいいのだろうかということの研究の対象にしておりました。プログラムでは、やはり分析的に見るとか、実は日本の授業研究を私たちは自明のように使っていたわけで、それを相対化する必要があるという研究力が、このプログラムでも磨かれました。

そして、そのプログラムを修了した後に、私は博士課程に進み、今は大学で研究をしているのですが、ずっとそれを追っている。やはり研究に終わりはない。ですから、たぶん問題意識が続いている方は、自然と博士課程後期に行っている人がザンビアプログラムでは多いので、自然の流れで博士課程後期に行き、研究職を目指すという道につながっていくのかなと、このプログラムはそういう流れもあるのかなと私は感じています。

最後に、国際協力の実践ということですが、キャリアパスといったときに、私は目標となるキャリアパスが実はあったと思っています。それは先輩方、ここにいる中和さんもそうですが、修了生には木根さんや松原さん、内田さんという方もおられて、その方々が大学教員になっておられます。そういう道が目の前にできてきつつあって、私も大学教員に行けるのではないかとということで、実際、やはり私たちは馬場先生をロールモデルとしておいていたのかなと、すごく感じています。

そういう意味で、研究職のキャリアパスはできつつあるのですが、国際協力の実践者ということでのフロントランナーが、まだプログラムからできていないと思っています。ですから、IDEC、またはザンビアプログラムに国際協力の実践者というロールモデルはどこにあるのか、それが、私は今、考えている問題意識の一つなのかなと私は思っています。

司会：馬場

ありがとうございました。語り出すといろいろな視点が出てきて、最初に一回り、ご紹介

も含めてお話ししていただいたのですが、随分時間が経ってしまいました。残り時間を考えると、こちらに登壇しているシンポジスト方にお話ししていただくというよりは、フロアの方からご意見等をいただいたほうがよさそうに思います。

まず、最初の発表や、今回、各シンポジストからいただいたご意見、コメントについて、もしご意見、ご質問等がありましたら最初に伺いたいと思います。それで若干やりとりをして、もし残りのお時間がありましたら、そこでもう少しほかの点について触れたいと思います。

ご意見、ご質問等がございましたら、よろしく願いいたします。

参加者：山中

私はザンビアプログラムの OB の山中と申します。今は民間企業で働いています。

一つ質問があります。専門知識ということで、重視していることが表から分かるわけで、石井さんの話の中でも専門知識が重要だというお話があったと思います。特に新卒で協力隊に参加する人は、大体の方が自分自身の経験のなさや、専門知識の少なさを後悔しながら研修を受けたり、派遣されたりするわけですが、結局、その専門知識のなさというのは、具体的にはどこまであれば十分なのかが明確でない気がします。

結局、その局面、局面で背伸びしながら対応していくしかないだろうと僕自身は思っているのですが、その専門知識はどこまであれば十分なのか、経験としてどこまであればいいというのは、具体的にはどのようにお考えになりますか。

司会：馬場

幾つかご意見、ご質問を聞こうと思います。他にございますか。

参加者：松本

私は開発コンサルタントをしております松本と申します。私は、關谷先生がおっしゃったアウトローの先端を行っております。もともと 30 年前の青年海外協力隊の OB です。

今日、お聞きしたい点はいろいろあるのですが、特に最初の馬場先生のプレゼンの中で、大学と協力隊が連携し、研究と実践ということで、このプログラムは我が国初の取り組みとありました。まさに 13 年たって、このような形で、キャリアの話をされているということで、非常に感慨深くお聞きしていました。

実は私は協力隊事業 50 周年³の取り組みに対し、今後事業をどう変えようか、変えるべきではないのかという、戦略ビジョンの仕事を請け負っています。同じ形で、皆さんも大学から見たプログラムの事業評価など、ある意味で非常に似ているようなところがあります。

³ JICA 青年海外協力隊事業は 2015 年に発足 50 周年を迎えた。1965 年に初代隊員を派遣して以来、アジア、アフリカ、中南米等世界 88 か国で、約 4 万人に上る日本の青年が開発途上国のために活動を展開してきた。

今日のシンポジウムはテーマがキャリアなので、これから申し上げることは、今回のテーマにあまり合致していないのですが、13年活動を行って相手国への貢献、プログラム事業として13年間相手国に何が貢献できたのか、あるいは何をやってきたのかという視点も重要であると思いました。私自身もザンビアで何年か前に実際現場を見て、授業教材例や勉強会の成果物が現地協力隊員宿泊所にあることも知っているのですが、その上で、13年の実績からプログラム全体としてどうなのかという視点の重要性を挙げたいと思いました。

テーマに戻り質問ですが、プログラム事業という形の中で、今、大学もグローバル化ということで、他の大学がどんどんグローバル化を進めており、スタディーツアーなど実施しています。ザンビアプログラムの取り組みとして一番よいと思うのは、海外でのボランティア活動が大学での単位として認められ、最短3年6カ月で修了できることだと思います。

現在、いろいろな制度が変わり、どこの大学も短期であったりスタディーツアーなどいろいろな取り組みが開始されています。その中で、大学の先生方から見た、協力隊とコラボ(協働)する意味での利点、あるいは今後の課題みたいなところについてお聞きできればと思います。

司会：馬場

もう一つぐらいいかがでしょうか。他にございますか。

では、今2つのご質問をいただいたと思います。

専門知識というのはどの範囲かということで、直接的には石井先生のお名前が挙がっていましたが、石井先生と清水先生のお二人に、専門知識のことについてお答えいただきたいと思います。

それから、今いただいた大学のグローバル化の文脈で、今はいろいろ大学が取り組みをしているということですが、協力隊、JICAと協働することの意味というか、メリットということ。そういうことと言えば、關谷先生は、特にJICAという意味ではないかもしれませんが、国連ボランティア計画でプログラムを回しておられる観点からでも結構ですし、JICAとの協働の中で考えられるようなことがあれば、ご意見をいただければと思います。また、山田次長からは、協力隊側から見てどのように見えているかということがあれば、ご意見をいただければと思います。

まず石井先生、よろしく願いいたします。

シンポジスト：石井

山中さんからご質問いただいた専門的知識をどう捉えたらいいかということですが、私としては、全部二重丸になっていますが、そのレベルはすごく幾つもの層になっていて、際限がないというか、ステップ1がここで、ステップ2がここでといった段階すら、今は説明できないのですが。

例えば、私は12年間学校教員をしていて、そのうち7年しか実際は教員をしていません

が、そういった中で、最初の1年から3年の私と、やはり4年以降の私は全然違います。知識という目に見えているような感じがしますが、体感というか、感じているものとか、それはほとんど説明できない暗黙知という話にもなりますが、そういうものもあります。これが知識だよと投げてキャッチボールしたりはできなくて、そういった捉えられないものを捉えようとする研究を今やっているのですが、今の研究の私の関心とも関わっていて、なかなか難しいなということがあります。

それで、どこまでということはないのですが、やはり初めて教壇に立った方がザンビアプログラムに参加するというのは、なかなか酷なことではあったと思いますが、ただ、それを乗り越えて、そこから教員になった方が結構いらっしゃる。野中さんとか、原田さん、実はこのプログラムを修了してから教員になった人がいて、おそらくその中には、また新しい課題意識を持ち、国際協力の現場に戻ってくる方がいるのではないかと、私はそんな気もしています。

そういった方が、もう一度、国際協力を目指したときに、おそらく前と違う価値とか、前と違うことができるのではないかと考えていて、それには、まだもう少しこのプログラムを見ていかなければなりません、それがその後どうなっていくのかが私の今の楽しみでもあります。そういったことを今、私は期待したいと思っています。



シンポジスト：清水

たぶん、世間一般専門知識集みたいなのは世の中どこを探してもないわけで、全体的な専門知識というのは、どこを探してもないでしょう。ただし、このザンビアプログラムの文脈で考えると、あくまでも私が考えるザンビアプログラムに行く前に持つておくべき専門知識と言え、例えば理科の授業をするのであれば、普通に学部教育で理科教育法、必修の単位を学ぶだけの知識は持つていてほしいなというつもりでやっています。

そこから敷衍（ふえん）させて考えるなら、もし国際協力士という職業があつて、その資格を取るのに必須の用語、実は未だに私は国際協力の専門家同士が話をしている中にすら入りと入っていけない時があるのですが、取りあえず、JICAの報告書に書かれていることが、すらすら読めるぐらいの知識は持つておく必要があるのではないかと思います。

要は、知識とは何のためにあるのかということ、一つの大きな役割として、あくまでもコミュニケーションの手段だと。一つの用語が出た時に、専門家集団の中で、その言葉のイメージとか概念が共有できていなければいけないわけですね。そういうところから考えると、例えば、誰かが書いたその国に関するレポートが読めるぐらいの語彙は持つていなければいけないのではないかと思います。

ですから、その辺りのところは、私が答えるより、JICA の山田次長から、これぐらいは知っておいてほしいというものが、もしかしたらあるのかもしれませんが。私は、理科教育の専門家として皆さんに持ってほしいのは、理科とは今、例えば相対評価と絶対評価の違いが分からなかったら仕事ができないですね。問題解決とはどんなものか、こういう言葉の意味が分からないと会話ができない。おそらく、最初はそのレベルだと思います。

あとは、いみじくも山中さんが言われたように、そこは少し背伸びをして、どんどん追いついていくしかないと思います。私も今現在、そういう形で大学教員をやっていますし、少し背伸びをして何とか追いつこうとする姿は、努力して勉強している過程であるので、そこは、自分は専門知識がないというのではなく、自信を持ってもらっていいのではないかと思います。

司会：馬場

お二人からご説明をいただいた中に、おそらくミニマムリクアイアメント（最低限のライン）のような共通する部分があるのと、それでは終わりきらない、勉強したら、さらにその上があり、その上があつてという、その専門知識の中の深い部分があると思います。そういうことをご指摘いただいたのかなと思いました。ありがとうございます。

続きまして、關谷先生、よろしくをお願いします。

シンポジスト：關谷

JICA と連携する利点ですが、2つあると思います。

1つは費用です。研究者であれ、実践者であれ、国際協力分野の人材になるためには、自己投資が相当必要になります。学生たちが進学するにあたって、現場に行くにあたって、自身で投資をしていくのは非常に大きな負担ですし、保護者にとっても大きな負担です。

しかし、例えば協力隊に行きますと、現地での生活費、渡航費、また、派遣前訓練の費用も支援して頂けますし、現地で活動中の間の積立金制度があるという話が馬場先生からもありましたが、それは非常に大事なことだと思います。

もう 1 つは安全です。本学は国連ボランティア計画と一緒に、学生をボランティアに派遣していますが、国連で派遣するのと協力隊で派遣するのでは雲泥の差になります。国連は学生を世界標準で見ているので、大人扱いです。例えば、現地活動中の休暇でどこに行こうと無関心です。協力隊の場合は、現地事務所に調整員の方がおられ、例えばこの地区は危ないので行ってはいけない、もしくは、報告無しに派遣先以外の国外に出てはいけませんといった安全管理の指導があります。幸運にも、日本は国内が安全です。だからこそ、日本の学生は海外の学生と比較すると、安全に対する感性が大変低いと思います。このような対象者を途上国に派遣して、いきなり国際標準での大人扱いするというのは非常に危険です。

また、最近は旅行などで途上国に行く学生も多いですが、少し旅行に行き無事に終わると、これでいいのだと考えるようです。ただし、それはたまたま良かっただけの話であり、途上

国も日本も何もなければ一緒であります、何か一回良くないことが起こると、その後の状況は全く違ってきます。例えば、日本で交通事故に遭うと、誰かが電話してくれて、救急車が来てとなりますが、途上国で交通事故に遭うと、誰かが来て、かばんや物を盗られ、救急車はありませんという話の中で、「えっ」と言っている内にショック死してしまう。このような話を学生にするのですが、この違いがなかなか学生は理解できないようです。また、学生だけではなくて、実は保護者でも理解をするのが難しい方がおられたり、さらには、大学はそのようなサービスをするのは当たり前と考える感性の人もあります。そして、このような途上国と日本の状態すべてが分かっているのが JICA であると思います。

ただし、JICA としてはそのような気持ちで学生を協力隊に預けられるのはいかなものかと思われると思います。広島大学はきちんとされているようですが、大学が事前研修をし、現地滞在中もきちんと連絡をとる、そのような手立てを取りながら JICA と連携をしていくことが重要であると思います。

他方、国連ボランティアでは、このような日本特有の状況を勘案されないで、学生を派遣する際には、事前研修の実施、派遣後の連絡確認（ウイークリーレポート（週間報告書）の提出など）を行う等の対応を派遣する大学として実施しています。

シンポジスト：山田

JICA 側から見たメリットについてお話しします。

私は冒頭、あいさつの中で、12 の大学と連携を結んでいると申し上げました。それは 12 の国のある課題に対して、大学の知見を生かして、その国の開発に寄与できるものについて結んでいるということで、やはり大学にしかないノウハウが活用できるという点です。

特に青年海外協力隊事業で言いますと、やはり理科教育、数学教育は全世界的に非常に要請が多いです。それに応募する若い人たちも多いのですが、要請案件のほうがもっと多く、なかなか応えきれない。充足率という言い方をしていますが、要請に対してどれだけのお応えができるかというところ、かなり低いです。

そういうことで、理科教育について事前にきちんと研修をしていただいて、特に広島大学さんは事前にザンビアプログラム勉強会があったりしますので、きちんと教え方を教えていただいて、学んで、赴任いただけるということで、有利だと思っています。

先ほど、關谷先生はあのような話し方をされていましたが、大学にとってメリットというのは、やはりグローバル人材育成という世の要求がある中で、協力隊を活用していただくということはそうですが、やはり現場に行くと、学生にとっては、日本では得られない体験ができるという



ところだと思います。やはり途上国、海外に行くと、どうしても、よく修羅場体験と言いますが、日本では得られない経験が2年間で得られる。

ここに挙げられている部分、専門知識、問題解決対応能力、コミュニケーション能力、豊かな感性とか職業使命感はどうかと思いますが、だいたい2年間で泣きながら成長すると、こういうことが得られるわけです。専門知識がどうかという話もありますが、少なくとも自分に専門知識がないことは分かるわけです。そして、もっと勉強しなければという気持ちにはなるわけですから、これは学生にとってのメリットかなと思っています。

司会：馬場

ありがとうございました。ザンビアプログラムというのは、理数科教育分野での学生を派遣するプログラムで、実は理数科教育は要請が多いけれども、実際には派遣数が必ずしも多くないということで、広大のプログラムを重宝していただいています。理数科教育といったときに、日本には非常に多く積み上げてきた知見があると思いますが、本日、理科教育の教材分野で、これまで大変実績がおありになるナリカの方々が来ておられるので、一言いただければと思います。

参加者：田中

株式会社ナリカの田中と申します。私どもは、小学校から高等学校までの理科室にある全ての商品を95年ほどにわたって提供しております。

このほど、JICAが実施されておりましたケニアのSMASEプロジェクト⁴の後を受け継ぐ形で、ケニアで案件化調査を行いました。私ども約1万5千点の教材の中から、手回し発電機「ゼネコン」が、ケニアでビジネスとして受け入れられるのかどうかという調査をしたのですが、その結果、可能だろうということで、現在、実証・普及化のプロジェクトで仮採択中、契約更新中です。

今のお話でいくと、当社は民間企業ですので、民間就職者のスキルになるのではないかと思います。そういう意味での専門知識というと、私どもとしては海外経験、先ほど關谷先生がおっしゃった部分、また山田先生がおっしゃった知らないことを知るというか、できないことを自分自身が理解する能力、そういったことが重要かと考えます。

私どもは民間企業ですから、売上を上げてなんぼ、自分の給料分を自分で稼げて初めて一人前であると考えます。従って、我々が一番見たいのは、その職業使命感、必ず自分の給料は稼ぐということになると思います。それから、営業マンであれば、内勤の事務の人や経理の人の分の給料も稼ぐ。ですから、自分の年収掛ける5倍が売上目標、これは絶対やるといった使命感が重視されると思います。それを達成するために、例えば現地の情報を集めると

⁴ JICAが、現職教員研修を通じたケニアの理数科教育の強化を目的に、2009年から5年間実施した技術協力プロジェクト。和文名は、「理数科教育強化計画プロジェクト」、英文名は、「Strengthening Mathematics and Science Education Project (SMASE)」

か、どういう計画を立てるとかが重要になります。そういう意味で、JICA の行っているプロジェクトを運営していくためのいろいろなステップ、我々でいうと PDSA サイクル⁵ですか、そういう QC⁶手法にのっとった分析を使って展開するといったことも、専門知識として学生さんには求めたいなと感じます。



ゴールとしては、我々は利益ですので、そこは大学の皆さんとは少し違う視点になると思います。

司会：馬場

ありがとうございました。突然ご指名をさせていただいて、どうもすみませんでした。4名の方に来ていただいている、せっかくの機会ですので一言いただきたいと思って、ご指名した次第です。

フロアのほうから、他に何かございますか。

参加者：畝

たびたびすみません。JICA 研究所の畝です。

いろいろ皆さんのご意見をお伺いして、このプログラムの良さや課題などがあぶり出されたのではないかと思います。実際に、關谷先生がお話しされたように、国際協力実践者として現場で活動を行う期間は、学会発表ができないなど、研究者として制約が出てくると思います。日本のアカデミズムの中では、学会発表や、査読付き論文を出さないと、研究者として大学や研究機関のポストが取れないということがあります。JICA の事業で言えば、専門家の方、協力隊員の方、コンサルタントの方も当てはまると思います。

しかし、このプログラムの「実践的な視点があるからこそ、研究のための研究をしているわけではない」というメッセージを通じて、皆さまに頑張っていただけることにより、後に続く人が増えるのかな、また日本のアカデミズムも変わってくるのかなという期待感を持っています。

あと、少し気になっているのが、皆さまが研究テーマをどのように作られているのかというところです。私自身は、OECD（経済協力開発機構：Organization for Economic Cooperation and Development）に出向していた時に、インターンを3人ほど預かったことが

⁵ 業務プロセスの管理手法の一つ。計画（Plan）→実行（Do）→評価（Study）→改善（Act）という4段階の活動を繰り返し行なうことで、継続的にプロセスを改善していく手法。

⁶ QC とは品質管理（Quality Control）の略

あり、1人は博士課程で、2人が修士課程でした。博士課程の方は、途中でドロップされましたが、2人は私がプロフェッショナルアドバイザーとしてサインして修士号を認めてもらいました。

その指導の中での話しですが、OECDの事務局では、ポリシーメイキング（政策立案）をする際に必要な研究というのがあります。そこでインターン2人にそれらに関するテーマを与えて、手伝ってもらいました。最終的にはよい成果が上がり、大学院からも評価を受けて、私自身は非常に満足することができました。

このような背景があり、このプログラムの中で研究テーマをどのように設定されるのかに、私自身は興味があります。例えば、事前にある程度テーマを設定して現場に行って研究されるのか、それとも現場の中でもまれながら、なぜこうなるのだというところを研究テーマに選ぶのか、その辺をご経験された方、またご指導される立場で教えていただければお聞きしたいと思います。

司会：馬場

ありがとうございます。他に、もし最後にお聞きしたいということがあればどうぞ。

参加者：薄田

兵庫教育大学の薄田です。

このプログラムが、純粋な青年海外協力隊のプログラムと異なる所は、研究をしながら実際にボランティア・教育活動ができることだと思いますが、実際には、発表でもありましたが、日々の業務に終わって大変な中、研究活動をするのは大変だと言っておられました。その改善策として、Web会議やスカイプなどをいろいろ試しておられて、それがあまりうまくいかなかったということも言われていましたが、そういう現実がある中で、次に、学生の研究をサポートするためにどのような手立てを考えておられるのかを教えて頂ければと思います。

司会：馬場

時間の関係もあるので、そろそろ切りたいと思っておりますが、他にはよろしいですか。もし、是非というものがあれば、よろしいですか。

こちらは、最後に一言ずつ、できればお一人ずつに、これはというところを言っていて締めたいと思います。全部に答えていただかなくても結構です。ご意見でもご感想でも、全体を通してありましたら言っていただければと思います。

シンポジスト：山田

今のご質問にはあまりお答えできることはないのですが、最後ということですので一言申し上げます。

研究を活動の現場にというところで、私の立場からすると、あまり研究に没頭するのではなく、活動はきちんとしっかりやっていただきたいとは思っています。

あと、研究テーマの設定時期については、私の聞いている範囲では、皆さまいろいろところで事前に決めている場合もあるし、行ってみて、やはりこのようにテーマを変えてみようと思える方もいるようですし、そういうご指導もいただいているように見受けられます。

いずれにしても、行ってから、こんなはずではなかったということにならないように、柔軟なご指導があるといいのかなとは思っています。

シンポジスト：清水

まずテーマ設定の時期についてですが、たしかに理想的には、実際に現場に出て、そこで問題を見つけて解決していく形のほうが、もしかしたら、きれいなのかなという気もしなくもないですが、実際に現場に出てしまうと、今度は逆に目の前の問題に引きずられすぎて、結局、研究テーマが定まらないということがあるので、基本は、こちらからこういうものをやってみたらどうか、学生がこういうことをしたいということとすり合わせながら、あらかじめ設定するようにしています。

そして、さらに派遣された研究の部分と現場の解決する部分は、きちんと切り分けなさいと。また、新しい問題が見つかったら、博士課程に上がってもらっても構わないし、研究は大学院でなければできないというわけではないという形では説得しています。

先ほどの彼からの質問に関しては、ここで出てきた以上のことは正直言えないので、唯一、答えになるかなと思うのは、先ほど馬場先生が言われたような、ザンビアに特定させて、ある程度的人数で集まれるような派遣の仕方をしていると。教員対学生だとどうしても限界があるので、派遣されたプログラム生同士で話し合うとか、そういう形で対応するようにしています。

シンポジスト：關谷

このプログラムの将来性についてですが、途上国で実際に技術協力プロジェクトを実施する、特に教育分野の場合、相手国のキーとなるカウンターパートが、修士号を当たり前保持していたり、先進国への留学支援を受けて博士号を取得した人が結構おられます。多くの途上国では学歴社会の要素が強く、専門家として派遣された日本人が博士号を持っていないという理由で話しを聞いてもらえないことがあります。そのような環境を考慮すると、ザンビアプログラムは、現在修士課程のプログラムですが、この上に、博士課程のプログラムを乗せることも可能ではないかと考えます。博士課程の中で調査研究に十分に行うことを考えると、修士と博士課程で合計6年半必要となるかもしれません。

それは、もしかすると協力隊のスキームを越えてしまうかと思いますが、例えば、広島大学が JICA から受託している技術協力プロジェクトに、現在も院生が関わっておられます

が、さらにうまく組み合わせて、現地でのプロジェクトに関わりつつ、自身の調査研究を行い、最終的に博士号を取得することができるような、いわゆるザンビアプログラムのシニア版というか、少しレベルの高いものが考えられると思います。ザンビアプログラムの国や分野の拡張という課題を抱えられている中で、このような提案は大変になるかと思いますが、こういった発展の方向も考えられると思いました。

シンポジスト：石井

修了生という立場から。

馬場先生から言われたわけでもないのですが、このプログラムは非常に素晴らしいプログラムだと自画自賛しています。今回の調査では満足度とかは聞いていませんが、このアンケートで修了生に満足度を聞けば、おそらく100%大満足したということになるのだろうと思います。行って後悔したという方を私は聞いていませんし、そういう意味で、どのように改善していけばいいかということですが、改善しなくてもいいのかなとも感じています。

ただ、もう一つ求められているのは、今、修了した私たちがこれからどうしていくのか、それを示していかなければいけないのかなと最後に思いました。私も研究者として今年採用されて、同時に実践者ということで、今、多くのゼミの学生がいますが、学生に、これまで影響を受けてきた人は誰かと聞くと、小中高の先生と言います。

やはり今の学生たちはほとんど、小中高で会った先生方が一番大きな像としてある。そして、私は今、教育大学で教師を養成しているわけですが、グローバルな教員をどんどん輩出していけば、末端まで日本のグローバル化が進むのではないか。やはり、それは子どもにとって身近な教師に求めていきたいと常に思っていて、私が一人でできるわけではないのですが、ザンビアプログラムを修了した多くの修了生が少しずつグローバル化に貢献できれば、おそらくこのプログラムはフロントランナーという意味で素晴らしい貢献をしているのではないかと思います。

司会：馬場

ありがとうございました。模範的な回答をいただきました。

司会の不手際でやや延長気味ですが、最後、もう少しだけお話しさせてください。

今日、皆さんの意見をつらつらいただき、私自身の考えていたことを整理したり、また広げたりしながら感じたことを数点述べさせていただき、その回答の中で、先ほどいただいた質問にも少し答えられればと思います。

一つ目は、いろいろな形の架橋。それは実践と研究という意味での架橋もそうだし、ザンビアプログラムの場合、日本とザンビアの架橋もそうだし、世代を超えたという意味での架橋もあるだろうし、産官学、先ほどナリカの方が利益ということを挙げられて、私たちはついついあまり利益を重視しないという意味で、ある部分の偏りを感じることはあるのですが、産官学が連携することにより、よりインパクトのある国際協力、もしかすると国際協力

人材を育成することになるのかなと思いますが、どうかたちで架橋をしていくか。今、周辺の異なった架橋の話をしました。どういふ架橋をしていくかというの、より質を高めていく上で重要だと思ひました。そういう意味で、先ほど關谷先生から今後のザンビアプログラムに期待するお言葉をいただきましたが、ぜひ発展させていければと思ひます。

そういう架橋するといふのは、架橋すること自体も実は目的になると思ひています。ネットワークングといふのは、やはり今の社会の中で非常に重要だと思ひます。ついついネットなどに頼って顔が見えなかつたりします。顔が見えないかたちでの電子情報を使ったつながりもあるでしょうけれども、顔が見え、お互いの気遣いが分かる中でのつながりも大事だと思ひます。

そういう意味での架橋を、今度は質的に転化していく必要があると思ひます。關谷先生からいただいた、より質の高い研究といふのが、今、回答をしようと思ひているわけではありませんが、これから私自身が考えていかなければならない課題です。

21人修了したといふことは、もう21本の修士論文があります。しかも、全てザンビアの教育分野で。おそらく日本の大学の中で、特定の国の教育分野で、これだけ知が集積している例はないと思ひます。ですから、それをレビューしながら、一段上に高めていくようなことをしなければいけないと思ひます。それが、まさにご指摘いただいた、より質の高い研究といふことかなと思ひます。

うちの大学院生は、我々が行ったときにワークショップを行いますので、そこで学会発表のような場面を作ります。おそらく一般の学生たちは、そこに参加するのに非常に高いハードルを感じているのですが、それをしてもらうと、普段は研究指導を受けていないですが、少し頭を使い、こういう発表をすればいいといふ意味で刺激も受けるでしょうし、実はザンビアプログラムとは全く違うのですが、先ごろ、インドネシアで国際学会が開かれた時、私はバングラデシュで技術協力プロジェクトをやっているのです、その関係で、バングラデシュの現地にいる協力員が発表したのです。ですから、これは全員がしなくてもいいと思ひますが、学会で発表する機会を提供するといふことを、もっとうたっているのではないかと。

山田次長のお話からは、研究をすることによって国際協力がおろそかになってはいけないといふことがあり、私も同意するのですが、それは違うと思ひます。おそらく、その国際的な学会で発表する子は、ほかの人以上に国際協力を実際に頑張っていて、その上でその質を高めたいと思ひからこそ発表する、もしくは研究することにより、もう一度、その意味を問うているのです。すごく時間を割いています。言われないのに、すごく考えて、データを集めて、研究をして、その意味を問うている。そういうプロセスが非常に大事だと思ひます。

そういう意味で、研究の質を高めるといふのは、個々の学生の研究の質を高めるのもそうだし、それをさらに一段高い所に引き上げていく、そして既に行われた研究も、もう少しメタレベルで研究していければと思ひました。

そういう中で、研究テーマの設定の時期とかは関係するだろうし、研究テーマをどのよう

に設定するのには関係すると思うのですが、基本的に大学の研究は、大きく分けて政策研究とインタレスト・ドリブン・リサーチ（興味・関心主導の研究）で言うと、インタレスト（興味・関心）に端を発すると思います。ですから、それぞれの学生が、自分でこの研究テーマをやりたいと思うことがすごく大事なんですね。

ただ、その過程で、我々がいろいろな情報を出して、それで考えながら、少しずつ自分が研究できる、もしくは研究の興味が湧くような形に持っていくという意味では、研究テーマの設定は、私が見ていても、最初からどんどん変わっていく学生もいれば、ほとんど変わらない学生もいます。最初に入ってきて、これをやりたいと言ったまま、最終ゴールまで行ったケースもあって、それがいいのか悪いのかというと、紆余曲折する学生は、出来の悪い我が子ではないですが、かわいいし、ずっとストレートにいった子は、手間暇掛からなかったな、いい子だなと思う部分もあります。

冗談はさておき、そういう意味で研究の質をどう高めていくのには大事ですし、それをどうサポートするかというのは、私たちができる部分と、おそらくできない部分があります。私たちがおそらくできない部分に関しては、もっと間接的に、それが話し合ったりできる環境をどういう形で整えるかというので、先ほど清水先生も言われたように、少しグループ化させるとか、先輩との交流の場面をつくるとか、そんなことを考えています。

今回のアンケートの中で出てきた修了者からの意見の一つに、2年間は長いから、2年間の派遣の途中に、一度日本に帰ってきて、資料を集める機会を設けるべきだという意見がありました。これは、おそらく制度的にはできると思うのですが、自費です。ですから、それはオプションにして、もし必要であれば帰ってきて、修了判定をして、途中経過の発表をして、いろいろなデータをもう一度集めるというのは可能かなと思いました。

大きくは、その架橋というのと、研究テーマをいかに高めていくかという全体像を描いていくことが重要だと思います。

つたない司会で、大幅に過ぎましたが、ここでシンポジウムを終わりにしたいと思います。本日、シンポジストでご登壇いただいた4名の方に拍手をいただけるでしょうか。本日は、誠にありがとうございました。

シンポジウムを終えて

本シンポジウムは、テーマを「今後の協力隊×大学院教育の連携の可能性」と設定し、「ザンビア特別教育プログラムのキャリア形成を中心とした成果」と「今後の教育プログラムとしての改善点と可能性」について議論しました。ここでは、その論点を振り返り、今後のプログラムの次の段階への土台としたいと思います。

論点の1つ目である「プログラムのキャリア形成を中心とした成果」では、以下3つが確認、議論されました。

① 多様な視点をもった人材の育成

「研究視点を持った現場の実践者」、あるいは、「現場の実践の視点を持った研究者」といった人材の育成が挙げられました。その他にも、ボランティア活動からの視点のみではなく、より広い視野を持ってザンビアの教育問題を考えていける視点（課題意識の高さ）、洞察力、言語・文化を超えて経験をした豊かな感性等、本プログラムを通して育てることができた能力も確認されました。

② 国際的な視点を持った教育人材の育成

特に本プログラムの修了生の約3割が、日本の学校で教員となっていること、プログラムの経験を活かしながら教員の立場から今後も国際協力に関わりたいとの意見が確認されたことから、日本社会への還元も成果の一部であるとの意見が挙げられました。

③ 人材育成を支える支援体制

キャリア形成を中心とした成果の他に、13年間のプログラム運営中に、支援体制を整えたことが成果として確認され、具体的には、協力隊派遣前のザンプロ経験者を巻き込んだ勉強会の開催、協力隊として派遣中のIDECでの単位交換制度、派遣中の一部休学制度等が挙げられました。また、JICAとの連携による強みの一つである、現地での安全・健康管理への支援体制が再確認されました。

論点の2つ目では、以下3つが議論されました。

① 論文等のさらなる英語での発信

本件は以前より指摘があり、対応策として、IDECは2007年よりザンビア大学、JICAザンビア事務所と協働して、ザンビアでワークショップを開催しています。そこで、ザンビア大学、ザンビア教育省、学校の教員等を招待し、ザンプロ学生が自身の研究を発表する場（英語）を設け、研究のフィードバックができる仕組みを確立しました。一方で、ザンビアでの発表のみに留まらず、ドナー会合の場等で現場の課題を示せるような形で活用できるように、論文の英語化へ期待を込めた意見が出されました。

② キャリアパスの拡大

研究者、教員へのキャリアパスの確立が成果として確認されると共に、今後はさらなる

国際協力の実践者の育成、民間企業へのキャリアパスの拡大が議論されました。また、「実践と研究」、「日本とザンビア」、「世代を超えた」等、本プログラムを通じた架橋とは別に、今後よりインパクトのある国際協力人材に向けて「産官学」の架橋の可能性についての意見も出されました。

③ プログラムの高度化

修士の上に、博士のプログラムを乗せたシニア版の可能性について意見がでました。具体的には、協力隊のスキームを超えて、JICA 技術協力プロジェクトと連携し、現地調査や国際協力実践経験を積みながら、最終的に博士号を取得するような発展の方向性も提案されました。

上述のように、シンポジウムでは、これまでの国際協力人材育成に関する成果を確認しつつ、その成果に更なる期待を込める形での課題や可能性について意見が交わされました。そして人材育成の他に、プログラムそのものの質の向上、特に大学の機能の 1 つである研究の視点について、以下のような議論が交わされました。

① メタ研究の必要性

現在、ザンビアの教育分野における 21 本の修士論文があり、それは特定国、特定分野の知の集積という成果として確認されました。今後は、さらに個々の学生の研究の質を高めると同時に、それら論文をレビューしながら、メタレベルでの研究を通し、研究全体の質を一段上に高めていく必要があるのではとの意見が出されました。

② 長期的視点

縦断的調査で確認した育成されたキャリアパスや実績数で評価することも可能であるが、プログラムを通して、どのような大学の教員になったのか、ザンプロ修了生の研究テーマの傾向、あるいは、どのような研究活動・講義ができるか等、その中身を質的に検証する可能性について意見がでました。

【謝辞】

おかげさまで、当日は、土曜日にも関わらず約 40 名が参加され、上述のとおり、お昼から夕方まで密度の濃い時間を共有できたのではと思っております。また、シンポジスト、並びに参加者の方から本プログラムについて忌憚のない、また愛情のこもったご意見を頂くことが出来ました。

今回の成果報告会&シンポジウム開催にあたり、文部科学省、JICA 青年海外協力隊事務局より多大なるご支援をいただきました。また、プログラムの修了生には、アンケートの協力を受けたと共に、当日に発表者や参加者としても足を運んでくれました。皆様のご支援、ご協力に、この場をかりて、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

広島大学大学院国際協力研究科
研究員 下田 旭美



シンポジウムを始める前に、



HIROSHIMA UNIVERSITY



前回のシンポジウム（2009）での課題

1. プログラムを通して育てるべき能力とは？
2. 実践と研究の関係性（研究のための活動に
ならないか？）
3. プログラムの制度（学生の能力を高めてい
ける工夫と、必要に応じて柔軟に対応できる
制度）
4. 研究成果の普及と発信

2



育てるべき能力

1. 国際協力実践者
 - ✓ 国際協力人材に求められる6つ資質や能力（出所：JICA HP 『しごと@JICA』
<http://partner.jica.go.jp/resource/1417772336000/shigoto/6abi.html>
2. 研究者
 - ✓ 世界トップレベルの研究者に求められる能力（出所：文部科学省HP『教員に求め
られる資質能力』）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingqi/qijyvutu/qijyvutu10/siryo/attach/1335213.htm
3. 学校教員
 - ✓ 教員に求められる資質能力（出所：文部科学省HP『教員に求められる資質能力』）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/needs/
4. 民間就職者
 - ✓ SPI3の測定領域（出所：リクルートHP 『SPI3の測定領域』）
<http://www.spi.recruit.co.jp/spi3/measurement.html>

* SPI3は、リクルート社が開発した、採用で使われる「適性検査」であり、現在には多くの企業で採用試験の際に「適正検査」として使われている。
* 民間企業カテコリは、職種の種類が上記3つのカテゴリーより広いため、民間企業の採用時に多く活用されている「適正検査」で、どの能力を注視し
ているかという視点から取り入れている。



育てるべき能力（まとめ）

1. 専門知識
2. 問題発見・解決力、現実対峙力
3. 社会性、協調性、コミュニケーション能力
4. 職業使命感
5. その他（豊かな感性）

4

縦断的調査からのカテゴリー別能力 (1)

能力 キャリア カテゴリー	専門知識		問題発見・解決力、現実対峙力		豊かな感性
	分野・課題能力	援助知識・経験	総合マネジメント力(問題解決の方向性を提示し、解決方法を決定していく力)	問題開発・調査分析力(情報収集、分析力、案件集積、形成能力)	
国際協力実践者					
研究者	幅広い知識を基礎とした高い専門性		主体的な課題設定能力	強い意志、ねばり強さなど精神的な力	未知のものへのチャレンジ精神
学校教員	実践的指導力(教科等に關する専門的知識)	実践的指導力(人間の成長についての理解)	変化する時代を生き抜くための実践的指導力(広く豊かな教養)	論理的思考力	
民間就職者			行動的側面(高い目標、意欲)	意欲的側面(疑問や競争に対峙するハワニー)	構造的側面(ストレスや失敗の受け止め方等)

5

縦断的調査からのカテゴリー別能力 (2)

能力 キャリア カテゴリー	社会性、協調性、コミュニケーション能力		職業使命感		豊かな感性
	国際的なコミュニケーション能力	特定国・地域における実務経験	倫理観	実践的指導力(教育者としての使命感)	
国際協力実践者					
研究者	国際的なコミュニケーション能力	社会への説明能力			独創性
学校教員	地球の視野に立つ実践的指導力	変化する時代を生き抜くための実践的指導力(人間関係構築力)	教員の職務から求められる実践的指導力	実践的指導力(児童・児童・生徒に対する愛情)	創造性
民間就職者	* 必要であれば英語	行動的側面(社会的行動力、思慮的粘り強さ等)	社会的側面(社会関係の構築力)	能力(思考・判断・コミュニケーション能力)	

6

縦断的調査からのカテゴリー別能力 (まとめ)

能力 キャリア カテゴリー	専門知識	問題発見・解決力、現実対峙力	社会性、協調性、コミュニケーション能力	職業使命感	豊かな感性
	国際協力実践者	◎	△	◎	
研究者	◎	○	△	△	◎
学校教員	◎	△	△	◎	
民間就職者	◎	◎			

7

1. プログラムを通して育てるべき能力とは？
2. 実践と研究の関係性(研究のための活動に
ならないか?)
3. プログラムの制度(学生の能力を高めてい
ける工夫と、必要に応じて柔軟に対応できる
制度)

8

閉会の辞

本日はお忙しい中、たくさんの方々がおみえになりまして、特に JICA の山田さま、關谷先生、本当にありがとうございます。

私自身は 1994年辺りから始まったフィリピンのJICAの技術協力プロジェクト、それから1998年から始まったケニアのプロジェクト等で汗を流したというところで、話せば長くなりますので、最後のご挨拶として、1枚だけポンチ絵を準備しました。

これは、広島大学で実施している教育プログラムですが、私達は、ザンビアで一つのモデルができたのではないかと考えています。先ほど申し上げたフィリピンやケニアでのJICA技術協力プロジェクトでは、昔からプロジェクトと青年海外協力隊のグループ派遣が、どうシナジー効果を高めていくかということが課題でした。そして、それは難しかったということです。

本プログラムはプロジェクトからではなく、青年海外協力隊のグループ派遣の一つのスキームとして始まりました。その後、ザンビアでJICAの技術協力プロジェクトが始まり、そのプロジェクトとうまく連携を取り、一つのスキームとして実施される過程で、プロジェクトの課題となっていた「教育の国家カリキュラムではどうあるべきか」へ馬場先生や私が専門家として、プロジェクトにも絡んでいくという立体的な構造ができました。

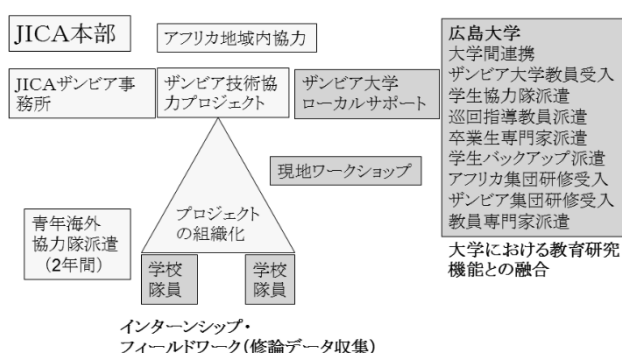
それから、広島大学はザンビア大学と連携して、この協力隊の派遣事業に対してバックアップをしてきました。しかも、それと絡んで、ザンビア大学から教員を広島大学に招聘して講義もしてもらい、あるいは、われわれがザンビアに巡回指導に行ったときにザンビア大学で講義をしたり、青年海外協力隊の理数科教師の一般隊員も招いて講義や、議論するといったプログラムができました。

そして、たぶんこれはJICAだけではなく、国際開発関係のプロジェクトの問題点と考えているのは、プロジェクトが終わった後のことです。終わった後に、人的なつながりをどう保つかということであれば、これができるのは大学だけではないかと思います。そういう意味で、おそらくJICAのプロジェクトは終わると思いますから、その後、どのようにバックアップしていくかというのは、我々大学の使命だろうと感じております。

あいさつよりも説明になってきましたが、このザンビアプログラムを通して、どういうシナジー効果が考えられるかということでご紹介をしました。

先ほど、論文の話もありましたが、私のモットーとしては、研究のための研究だけはや

蓄積を生かした展開(ザンビアをモデルとして)



らないということで、要するに、実践に役立つ研究をしようではないかというモットーで私は指導しております。

今日は貴重な時間を割いていただきまして、本当にありがとうございました。

広島大学大学院国際協力研究科
教授・前研究科長 池田 秀雄



第三部
参考資料

アンケート結果
派遣実績等のデータ

報告会&シンポジウム アンケート結果 (回答合計 19 人)

Q 1. 報告会&シンポジウム全体について伺います。

1. 良かった 19 2. ふつう 0 3. 物足りなかった 0

【コメント】

- ・ 具体的な活動をしている姿をイメージすることができた
- ・ ザンプロ関係者だけでなく、多くの関係者がそれぞれの視点で語っていらしたので、とても興味深かったです
- ・ 大学院=研究者なのかもしれないが、民間の目や評価も取り入れられれば、議論が深まるかもしれない
- ・ 参加経験者の話しがあったことが良かったです
- ・ プログラムの組み立てがとてもテーマを解説し、理解を深める観点でとても良かったと思います セミナー報告会の実施の時の参考にもなりました
- ・ 大学院プログラムの成果をどう測定するのかという点でも参考になりました
- ・ グローバル人材育成の難しいことがよく分かりました

Q 2. テーマ及び内容について伺います。

1. 良かった 16 2. ふつう 3 3. 物足りなかった 0

【コメント】

- ・ 不安に思っていたようなことを解消することができた
- ・ 各々のテーマに即しており、また内容が限られた時間中にポイントを押さえたものとなっており、とても分かりやすかった
- ・ テーマがかなり広すぎているものの、13年間の協力による成果・貢献についても何らかのプレゼンがあった方がよりよかったです
- ・ 実際の経験に基づく内容でよかったです

Q 3. 会場について伺います。

1. 満足できる 12 2. ふつう 5 3. 不満である 2

【コメント】

- ・ 寒かった (3)
- ・ きれいで清潔感のある会場だった
- ・ クリーン且つスクリーンもクリヤー
- ・ 但し、少し寒かったし風が吹いていた
- ・ 前半、少し寒かったです

Q 4. 講演の曜日について伺います。

1. 日曜日でよい 3 2. 他の曜日がよい 2 3. 何曜日でも構わない 1
4. 土曜日でよい 6 5. 無回答 2

【コメント】

- ・ 平日は時間がありません
- ・ 個人的には土曜日でありがたかった
- ・ 個人的には週末で有難く感じました。(平日では社会人にて参加ができなかった)

Q 5. 講演の時間について伺います。

1. 今回の時間帯くらいでよい 19 2. 別の時間帯が望ましい 0

【コメント】

- ・ 早すぎず、遅すぎず、良い時間帯だったと思う

Q 6. このセミナーを何でお知りになりましたか。

1. ポスター・ちらし 2
2. メルマガ/ML 3 (日本アフリカ学会のML)
3. WEB 掲示板等 3
4. プログラムHP 0
5. その他 9 (大学の指導教員から、紹介、Facebook、JICA ホームページ、JICA 図書館で知りました)
6. 無回答 2

Q 7. 実施方法について、もっとこうしたら良いというご意見があればお聞かせ下さい。

- ・ ザンビアの教育事情や、隊員の担当業務の背景・内容も紹介されるとよりよかったですと思います。
- ・ JICA 図書館に置かれていたチラシが1月の早い段階で全部なくなった様です。大切なテーマですし、より多くの人参加者を募るべくチラシの配布状況をチェックしたらよいかと思います。

Q 8. 今後とりあげたらよいと思われるテーマは何でしょうか。

- ・ ザンビアの成果発表と今後の課題
- ・ いろいろな進路に進んだ人の今をもっと具体的に取り上げると面白くなるのでは？
- ・ 教員や一般企業に就職した方が、ザンビアでの経験がどのような影響を与えたか(あるいは、与えてないか)について
- ・ 今後も当該プログラムについて定期的に報告をして頂きたいです。
- ・ 「相手国」への貢献という意味で、途上国の教員のキャパビルについて等

- ・ 相手国への貢献について
- ・ 最後に馬場先生がおっしゃっていたような、21本の修士論文のレビュー、批評といった作業の展開をみてみたいと思います。

Q9. その他ご自由にお書きください。

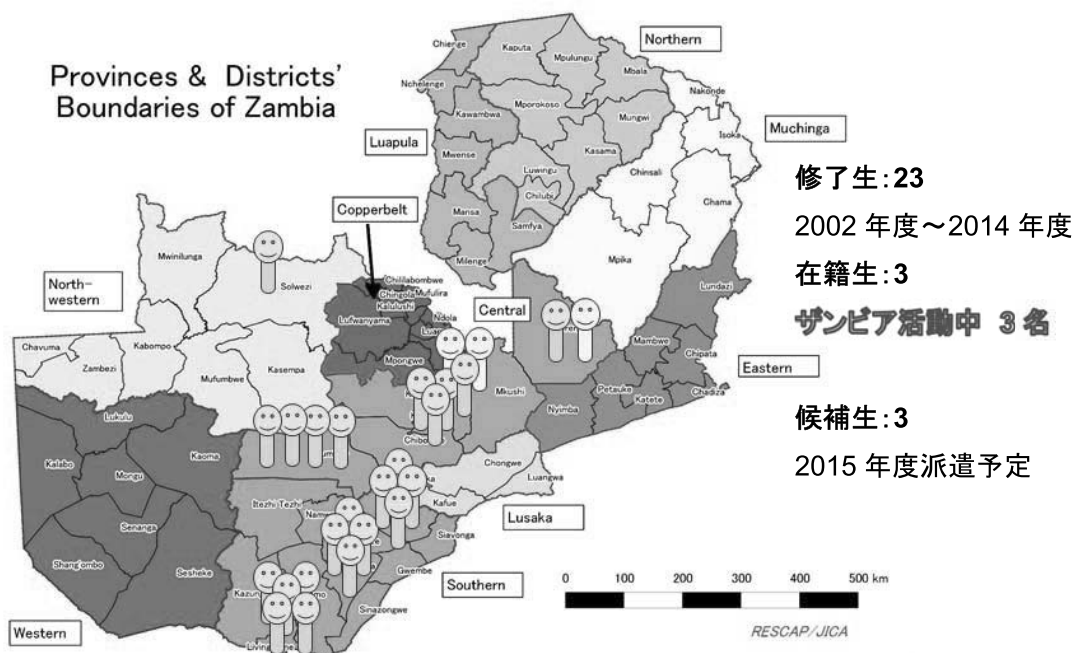
- ・ 来年、ザンプロのメンバーとして派遣させてもらえるように、今から”専門知識”を少しでも多く見につけられるように精進してまいります。
- ・ 個人の関心・興味（国際協力、人材育成、日本の大学とアジア・アフリカとの連携、アフリカ事情、2014年度ザンビア出張の機会を逃してしまった事等）にまさにマッチしたイベントに参加できました事は幸運でした。
- ・ 数年後に、50代を迎えますが、日本の国際協力になにかしら貢献ができる手があればと思う次第です。
- ・ 娘はまだ小学3年生ですが、本日の発表された竹内様のように、積極的に取り組み、堂々としたプレゼンテーションをできるように育ててほしいと思いました
- ・ 横浜国立大学で大学の国際化に関する仕事をしていますが、しっかりと地に足の着いた教育活動をやっておられることに感銘を受けました
- ・ 貴重な機会をありがとうございました
- ・ 「専門知識」はあまりにも抽象的すぎるように思います。専門性については、もう少し範囲を狭く定義すべきではないでしょうか。

広島大学ザンビア関係実績

1. 学生派遣 (2014年度時点で、修了生は23名)

(入学)年度	JOCV 長期派遣	JOCV 短 期派遣	インターンシップ	
			人数	配属先
2002 (平成 14) 年度	3	-	-	-
2003 (平成 15) 年度	3	-	-	-
2004 (平成 16) 年度	2	-	-	-
2005 (平成 17) 年度	4	-	-	-
2006 (平成 18) 年度	0	-	-	-
2007 (平成 19) 年度	1	-	1	ザンビア大学
2008 (平成 20) 年度	5	1	1	ザンビア大学
2009 (平成 21) 年度	2	1	2	ザンビア大学, 国家試験委員会
2010 (平成 22) 年度	1	1	-	-
2011 (平成 23) 年度	2	-	-	-
2012 (平成 24) 年度	1	-	2	ザンビア大学
2013 (平成 25) 年度	2	-	3	ザンビア大学, 北西部州教育事務局, ムフリラ教員養成校
2014 (平成 26) 年度	0	-	2	ザンビア大学
2015 (平成 27) 年度	(3)	(-)	(-)	
合計	26 (3)	3	11	

* 括弧内は予定 **論文タイトルは添付1参照



2. 留学生招聘

文部科学省奨学生として

Mr. Nachiyunde Kabunga (2010年修士号取得, 213年博士号取得)

Mr. Mwanza Gabriel (2013年修士号取得)

JICA 長期研修生として

Mr. Benson Banda (2011年修士号取得)

3. 教員派遣

- ・ JICA との連携協定に基づき、毎年教員 (1 名) を日本の夏期休暇中に派遣。詳細は添付 2 参照。
- ・ 科学研究調査による教員派遣 (2009 年度 1 名、2011 年度 3 名、2012 年度 2 名、2013 年度 1 名)
- ・ JICA 短期専門家派遣：理数科カリキュラム改訂に関する支援 (2013 年度 2 名)
- ・ JICA 短期専門家派遣：理科教授法 (2014 年度 1 名)

4. 教員招聘

ザンビア大学教員 (Nkhata 講師) を科研で招聘 (2005, 2007 年度)。

ザンビア大学教員 (Hambokomaa 講師) を客員教授として招聘 (2006 年度)。

5. ザンビア大学 (UNZA) との連携

- ・ 部局間協定「広島大学大学院国際協力研究科-ザンビア大学教育学部」を 2002.12.20 に締結。その中では学生交流、教員交流、共同研究をうたう。
- ・ 共同研究ワークショップ (JICA との連携有り)
2007 年 8 月より毎年ザンビア大学にて、共同研究ワークショップを実施している。ザンビア側は教育省、カリキュラム開発局、国家試験委員会、学校長、教員、日本側は大学教員、学生、JICA、JOCV 等、ザンビア教育関係者が幅広く集い、研究・実践発表ワークショップを開催。その成果を次のジャーナルに編纂。ワークショップ開催費用の半分はザンビア大学側が捻出。詳細は添付 2 参照
- ・ UNZA 内広島大学コラボレーションセンター
2007 年設置。30 万円の初期投資 (2007 年ごろ)、30 万円 (2010 年度運営資金)
- ・ ジャーナル作成: 国際理数科技術協力実践・研究誌
The Journal of Research and Practice of International Cooperation in Science, Mathematics, and Technology Education
(最新版 2013 Volume 4, No. 1)

6. ザンビア教育省との連携

- JICA 国別研修（教育省高官受入れ、2009年）
- JICA 国別研修（カリキュラム専門官、2010年）
- JICA 国別研修（初等・中等学校における教材研究手法（数学Ⅰ）、2012年）
- JICA 国別研修（初等・中等学校における教材研究手法（理科Ⅰ）、2013年）
- JICA 国別研修（初等・中等学校における教材研究手法（数学Ⅱ）、2014年）
- JICA 国別研修（初等・中等学校における教材研究手法（理科Ⅱ）、2015年（予定））

7. 報告書等作成

- 文部科学省報告書: グローバル人材育成のための大学教育プログラム
「調査研究 グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する実証的研究 概要」（2009年）
- ザンビアプログラム成果報告会「国際協力の専門的人材育成を目指す先進的教育ザンビアプログラムの成果と課題～「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像～」(2009年12月)
- ザンビアプログラム成果報告会「ザンビアプログラムの成果と課題Ⅱ～「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像～」(2015年7月（予定）)

8. 科学研究費助成事業

準備期:

- 国際開発関係大学院と国際援助機関との連携による特別プログラム制度開発に関する研究（基礎研究（B））（中山修一）

初期:

- 開発途上国の理数科教員研修カリキュラム開発とその効果に関する実証的研究（基盤（B））（池田秀雄）
- 開発途上国に置く理数科リテラシーの開発研究—社会的文脈に着目して（基盤（B））（馬場卓也）

中期:

- アジア・アフリカ諸国の理数科教育協力に関する総合的研究（基盤（A））（池田秀雄）
- 理数科教育における教師の実践共同体とアイデンティティ形成に関する国際調査（基盤（B））（馬場卓也）
- 開発途上国の理数科教育における科学的応用力に関する調査研究（基盤（B））（清水欽也）

9. 大学独自資金

UNZA 内広島大学コラボレーションセンターへの30万円の初期投資（2007年ごろ）、30

万円運営資金（2010年度）

10. その他

ザンビア教育省は2013年度より、研究雑誌である *Zambia Journal of Teacher Professional growth (ZJTPG)* を創刊した。これは広島大学大学院国際協力研究科卒業生のイニシアティブによるものであり、これまで3冊が発行されており、広島大学（教員）2名、ザンプロ隊員4名で、6本論文が採用されている。（最新版 Vol.2No.1 2014）

ザンビア特別教育プログラム・博士論文タイトル

	タイトル	著者	提出年
1.	ザンビアの理科教育に関する状況分析と授業分析法の開発	松原 憲治	2009. 3
2.	ザンビア共和国における本質的学習環境の実践に基づく数学の授業開発研究	中和 渚	2011. 3
3.	ザンビア数学教師の教授的力量形成における省察の役割に関する研究 -授業日誌を用いた質的分析を中心に-	木根 主税	2012. 3
4.	ザンビア基礎教育における計算能力に関する研究 -妥当性と弁別性に注目した診断的評価を通して-	内田 豊海	2012. 3
5.	理科と数学を関連付けるカリキュラム構成原理に関する研究-ザンビア共和国中等理数科教育の事例を通して-	高阪 将人	2015. 3

ザンビア特別教育プログラム・修士論文タイトル

	タイトル	著者	提出年
1.	ザンビアにおける Zone Education Support Team の現状と可能性	内田 豊海	2006. 3
2.	国際教育協力としての教員センターに関する研究-ザンビア共和国南部州の事例からの検討-	谷口 正明	2006. 3
3.	理科教育開発における授業研究の意義と役割-生徒中心を目指すザンビアの基礎教育を事例として-	松原 憲治	2006. 3
4.	ザンビア基礎学校における数学的活動に基づく授業展開の現状と可能性	木根 主税	2006. 3
5.	ザンビア共和国における HIV/AIDS に関する情報量の多寡が予防行動に及ぼす影響	田邊 有司	2007. 3
6.	ザンビア基礎教育の図形学習における困難性に関する研究	石田 真美	2007. 3
7.	ザンビア後期基礎教育における生徒のおかれている文化的状況についての研究	辻本 温史	2008. 3
8.	ザンビア後期基礎教育における分数理解に向けた授業実験	有馬 祥英	2008. 3
9.	ザンビアにおける『本質的学習環境 (SLE)』に基づく数学科授業開発研究	澁谷 渚	2008. 3

	タイトル	著者	提出年
10.	ザンビア後期基礎教育における数学科授業分析の研究—教師・生徒の言語活動を中心に—	池谷 拓人	2008. 9
11.	ザンビア共和国の基礎教育における効果的な学校経営	福田 景子	2009. 3
12.	ザンビアにおける基礎算数能力の獲得過程に関する研究	佐々木 愛	2009. 3
13.	ザンビア児童の乗除法理解における社会的文脈の役割	山田 恭子	2010. 9
14.	ザンビア後期基礎教育における数学と文化をつなげる教材開発研究—図形領域に焦点をあてて—	木村 光宏	2012. 3
15.	ザンビア後期基礎教育における比例的推論の指導教材に関する研究	島本 史也	2012. 3
16.	Teaching and Learning Physics through Small Step Approach : A Case of A School in Central—Zambia	中里 春菜	2012. 3
17.	ザンビア基礎学校における学校改善プロセス	渋谷 至	2012. 3
18.	ザンビア中等教育における物理との関連を意識した関数授業に関する研究—文脈依存性に着目して—	高阪 将人	2012. 3
19.	ザンビア基礎学校における数学の効果的発問に関する研究	原田 朋枝	2013. 3
20.	ザンビア基礎教育数学科における「学習者中心」の再構築	野中 俊和	2013. 3
21.	ザンビア初等学校における基礎学力の学校間格差	山中 裕太	2014. 3
22.	ザンビア中等理科教育における授業の効果 —情意的側面と認知的側面に着目して—	竹内 希	2015. 3
23.	Factors behind School Girls' Pregnancy and Reasons of Their Return or Non-return to School in Kabwe, Zambia: From the Perspectives of Pregnant Girls, Parents, Teachers, Students and Ministry of Education	樺島 純子	2015. 3

ザンビア特別教育プログラム等連携実績

1. ザンビア大学との協同ワークショップの開催

本ワークショップは、ザンビア大学、広島大学、JICA と連携し主に以下の目的で2007年より実施されている。

- ① ザンビア大学、広島大学（教授）、JICA/広島大学（ザンプロ隊員）、JICA（一般隊員）が連携し、研究成果の発表を通じた意見および情報の交換の定期的な場を設定する
- ② 定期的な研究成果発表を通し、ザンビアにおける教育分野の研究人材を育成し、また、協力隊員の研究人材を育成する
- ③ 同ワークショップに教育省を中心とした教育関係者を発表者、並びに、参加者として招待し、研究成果を共有することで、ザンビアでの教育課題解決に役立てる

以下の表は、これまでのワークショップでの発表者をまとめたものである。

ザンビア大学ワークショップの発表者

日時	発表者					合計	参加者
	ザンビア大学 （教授）	教育省 （関係者、校長、教員含む）	広島大学 （教授）	広島大学 （ザンプロ隊員）	一般隊員		
2007年8月7・8日	1	0	1	5	0	7	100名以上
2008年8月7日	3	3	2	2	0	10	約40名
2009年8月11日	2	3	1	6	2	14	N/A
2010年8月11日*	4	2	1	5	2	14	N/A
2011年8月9日	5	2	1	2	2	12	N/A
2012年8月23日	4	2	1	2	2	11	約50名
2013年8月21日	6	2	1	2	3	14	約35名
2014年8月19日	5	2	1	3	1	12	約35名
合計	30	16	9	27	12	94	

*同年は、本ワークショップと広島大学教育開発国際協力研究センターが中心となり実施している「教育開発のためのアフリカ・アジア大学間対話」（A-A ダイアログ）ネットワークの教育フォーラムが共同で開催され、広島大学教授は教育フォーラムでの発表となっている。

2. ザンビア教師会（ザンプロ隊員と一般隊員）へのインプット

毎年巡回指導調査の際には、ザンプロ隊員への研究指導が行われると共に、ザンビア理科数科隊員で自主的に実施されている一般隊員を含んだ教師会にて、講義・話し合いを行っている。以下の表は2007年からの教師会での講義内容をまとめたものである。講義内容に関しては、できるだけ日常の協力隊活動に役立つものとなるように、ザンプロ隊員が中心とな

り、事前に講義内容の希望を関係隊員に聞き、それに合わせて、巡回指導担当の教員がテーマを決めている。また、希望者には、一般隊員も含め個別相談を適宜受けている。巡回指導調査に合わせての教師会における、講義テーマの事前調査や、個別相談の希望を取り纏め（一般隊員を含む）は、通常ザンプロ隊員が中心となり行っており、リーダーシップをとっている。

教師会でのIDEC教員等の講義内容

日時	発表者	講義内容
2007年8月13日	馬場卓也	教師・教材の側面からザンビアにおいて質の高い授業の実施について (日本の授業ビデオ観察を交えた討論などを通して)
	内田豊海	ザンビアの基礎学校における生徒の実情 (SACMEQ(南東部アフリカ諸国とUNESCO)を用いて研究結果)
2008年8月11日	馬場卓也	授業改善について (1) 何が授業で問題なのか (2) 授業を分析的に見る (3) 授業実践の再構成
	澁谷渚	(1) SLEを使った教材のドリルの説明 (2) SMASTE ワークショップの説明
2009年8月16日	清水欽也	・生徒の「英語力不足」、「論理的思考力の欠如」に起因する問題点 ・理科の「実験」の授業の中で見られる問題点
2010年8月14日	池田秀雄	・JICAの教育セクター技術教育プロジェクト ・フィールドワークへの提言 (テーマを例示する形で方法や内容を解説)
2011年8月10日	馬場卓也	・人生の転機で考えてきたこと ・教育開発研究から見えること
2012年8月24日	池田秀雄	・JICAの教育セクター技術教育プロジェクト ・フィールドワークへの提言 (テーマを例示する形で方法や内容を解説) ・ザンビアの生徒に考えさせる授業の作り方
2013年8月19日	清水欽也	先進国と途上国における科学的リテラシー
2014年8月20日	馬場卓也	・人生の転機で考えてきたこと ・授業実践の再構成(ザンプロ隊員の作成した指導案を基に授業改善の視点について)

3. JICA 技術協力プロジェクトとの連携

以下の表は、IDEC 教員、広島大学附属学校の教員、ザンビアプログラム修了生の技プロ、並びに、国別研修（IDEC 受託）への協力をまとめたものである。この表からも分かるように、IDEC 教員、広島大学附属学校の教員、ザンビアプログラム修了生が協力することによって、より連携のとれた質の高い協力の実施が行われている。

名前	所属先 (当時)	JICA授業実践能力強化 プロジェクト 長・短期専門家	ザンビア国別研修 講師
馬場卓也	広島大学 大学院国際協力研究科 教授	2013年 カリキュラム改訂支援	2010年 理数科教育カリキュラム改訂能力向上支援
		*2012年に科研費にてザンビア事前視察	2012年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅰ）
			2014年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅱ）
池田秀雄	広島大学 大学院国際協力研究科 教授	2013年 カリキュラム改訂支援	2010年 理数科教育カリキュラム改訂能力向上支援
			2013年 初中等学校における教材研修手法（理科Ⅰ）
			2015年（予定） 初中等学校における教材研修手法（理科Ⅱ）
清水欽也	広島大学 大学院国際協力研究科 教授	2014年 理科教授法	2013年 初中等学校における教材研修手法（理科Ⅰ）
			2015年（予定） 初中等学校における教材研修手法（理科Ⅱ）
神原一之	広島大学附属東雲中学校 教頭	2013年 理数科授業法・学校経営	2012年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅰ）
			2014年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅱ）
前田一誠	広島大学附属小学校 教員	2013年 数学教授法	2012年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅰ）
		*2012年に科研費にてザンビア事前視察	2014年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅱ）
志田正訓	広島大学附属小学校 教員	2014年 理科教授法	2013年 初中等学校における教材研修手法（理科Ⅰ）
		*2013年に科研費にてザンビア事前視察	2015年（予定）

2015年4月現在

		ンビア事前視察	初中等学校における教材研修手法（理科Ⅱ）
松原憲治	国立教育政策研究所 研究員 ザンプロ修了生		2013年 初中等学校における教材研修手法（理科Ⅰ）
木根主税	宮崎大学 大学院教育学研究科 准教授 ザンプロ修了生	2014年 数学教材研究実践	2012年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅰ）
		2015年（予定） 数学教材研究実践	2014年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅱ）
中和渚	東京未来大学 こども心理学部 専任講師 ザンプロ修了生		2012年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅰ）
山田恭子	株式会社VSOC ザンプロ修了生	2011.11.～2013.10. 長期専門家	2012年 初中等学校における教材研修手法（数学Ⅰ）

本冊子は、平成 27 (2015) 年 1 月 24 日 (土) に東京都港区にあるキャンパスイノベーションセンター東京で開催された、ザンビア特別教育プログラム成果報告会&シンポジウムの記録を目的として作成された。

「第一部 成果報告会」には発表資料等、「第二部 シンポジウム」には議論をなるべくそのままのかたちで書き起こしたもの、「第三部 参考資料」には補足資料を掲載した。

本冊子に掲載されている意見は基本的に個人の立場で発表したものであり、必ずしもそれぞれが所属する組織の公式見解とみなされるものではありません。

発 行

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and Cooperation,
Hiroshima University (IDEC)



国際理数科技術教育協力実践プロジェクト研究センター
The Center for Research and Practice of International Cooperation in Science,
Mathematics and Technology Education (SMATEC)



〒739-8529 広島県東広島市鏡山 1-5-1
TEL : 082-424-6944 FAX : 082-424-6904
E-mail : intlscim@hiroshima-u.ac.jp